

令和元年度指定

地域との協働による高等学校教育改革推進事業(地域魅力化型)
研究開発報告書

第1年次



徳島県立城西高等学校神山校

本報告書は、文部科学省の委託事業として、徳島県教育委員会が実施した令和元年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

令和元年度 活 動 記 録



第 1 回オープンスクール



校庭マルシェ



2 年生インターンシップ



孫の手プロジェクト



1 年生林業アカデミー



シードバンクスタディツアー



大正大学生との交流活動



1 年生まちぐるみしごと体験



校外学習（上勝町千年の森）



森林女子部 Monteki マルシェ



森林ビジョン講演会



第2回オープンスクール



造園土木科2年どんぐりプロジェクト



造園土木科3年どんぐりプロジェクト



国際交流チームプロジェクト



神農祭チームプロジェクト



加工品チームプロジェクト



景観創造チームプロジェクト



造園土木科 2 年伐木講習



1 年生石積み講習会



地域の方への聞き書き



全国木育サミット



愛媛県立三崎高校との交流活動



グラフィックデザイン講習会

課題研究発表会

令和2年1月22日(水)



は じ め に

校 長 小 原 史 明

本校は、平成31年度、文部科学省より、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の研究指定を受け、研究開発構想名「地域で学び地域と育つ神山校～中山間地の地域内循環モデルの構築～」をテーマに、研究開発に取り組んできました。この度、その成果と課題をとりまとめた第1年次の「研究開発報告書」が完成しました。

作成にあたり、関係の皆様方からご協力をいただきました。感謝申し上げます。

本校は、県都徳島市に隣接する神山町に存する全校生徒81名の学校です。昨年創立70周年を迎え、今年度、生活科・造園土木科を学科再編し、地域創生類を設置しました。地域と連携した教育を一層進め、地域に根ざした造園教育や持続可能な農業教育を通して学校の活性化を図り、地域産業や地域に貢献できる人材育成を目指しています。

神山町は、周囲を山に囲まれ、町の中央を流れる鮎喰川に沿って集落が点在する中山間地で人口約5000人の町です。人口減少と高齢化が著しく、町の存続は大きな課題でありました。

2015年12月神山町は創生戦略「まちを将来世代につなぐプロジェクト」を策定し、具体的な施策とそれを推進していく組織「一般社団法人神山つなぐ公社（以下神山つなぐ公社という。）」を設立しました。神山つなぐ公社はプロジェクトを実現していくために、町内外の様々な人や企業、団体、学校等に働きかけ、施策の実現へ向けて協働した取組を強力に進めています。また、町内に唯一の高校である神山校は、町の将来につながる地域教育拠点として位置づけられ、農業高校だからこそできる地域連携や地域の魅力づくり、地域の担い手育成に大きな期待が寄せられることになりました。一方、学校も町の力を得て、生徒の力を伸ばし、学校を活性化させたいと考えていました。

地域の思いや願い、期待と学校が描く教育の方向性が結びついて生まれたのが、学校設定科目「神山創造学」です。平成29年度から、学校の教員と神山つなぐ公社等の職員が中心となり、手探りで町をフィールドにした体験的な学びを追究してきました。さらに、その他の科目でも、神山町の施策に連動したプロジェクトに生徒を関わらせ、学校は役場や地域住民、企業、大学等と連携した教育、学校と地域との協働による学びを実践しつつありました。

本事業では、これまでに実践してきた「神山創造学」やその他の教育活動を深化させ、また新しい取組を実践する中で、その成果と課題を確認し、これからの神山校と地域の連携・協働の在り方やカリキュラムを開発しようとするものです。

この一年間の成果と課題は、学校と地域で共有して、次年度の協働に生かして参ります。事業実施に御協力くださいましたコンソーシアムを構成する、神山町、神山つなぐ公社、株式会社フードハブプロジェクトを始め、多くの企業、NPO法人、大学、地元中学校・小学校、保育所、団体等の皆様、そしてご指導とご助言をいただきましたカリキュラム開発専門家会議や運営指導委員会、徳島県教育委員会、関係していただいたすべての皆様に深く感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

目 次

I 研究開発実施報告（要約）	1
II 研究開発の内容	11
1 「神山創造学」の再構築	13
（1）「課題研究」の深化	13
（2）キャリア教育の充実	15
（3）他教科等と相互に関連させた指導	17
（4）基礎学力の強化	18
2 地域性を生かした質の高い教育環境の整備	19
（1）外部人材を活用した「専門人材の配置」	19
（2）多様な進路を実現する「教育課程の構築」	21
3 地域の生産・交流拠点の創出	24
（1）「スタディツアー」及び地域の種と苗をつなぐ「シードバンク」	24
（2）人とモノが行き交う「校庭マルシェ」	26
4 地域を学びの場とした実践	28
（1）演習林を活用した「森林ビジョン」	28
（2）6次産業化を学ぶ「耕作放棄地対策」	35
（3）地域の景観保全を担う「石積み修復」	37
III 「神山創造学」の取組	41
1 地域創生類1年	43
（1）神山を知るためのワークショップ	43
（2）まちぐるみしごと体験	45
（3）地域の方への聞き書き	48
2 造園土木科・生活科2年	50
（1）国際交流チームプロジェクト	50
（2）神農祭チームプロジェクト	51
（3）加工品チームプロジェクト	53
（4）景観創造チームプロジェクト	56
（5）他校との交流活動	58
IV その他の取組	63
1 森林女子部	65
2 神山まちぐるみ高校生インターンシップ	69
3 孫の手プロジェクト	71
V 成果・課題	75
VI 資 料	79
1 目標設定シート	81
2 高校魅力化評価システム診断結果	83
3 教育課程	84

I 研究開発実施報告（要約）

2 はじめに

本年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」（地域魅力化型）の推進校に指定された。この事業は、新高等学校学習指導要領を踏まえ、Society5.0を地域から分厚く支える人材の育成に向けた教育改革を推進するため、「経済財政運営と改革の基本方針2018」や「まち・ひと・しごと創生基本方針2018」に基づき、高等学校が自治体、高等教育機関、産業界等と協働してコンソーシアム（協働体組織）を構築し、地域課題の解決等の探求的な学びを実現する組織を推進することで、地域振興の核としての高等学校の機能強化を図るとして、本校が令和元年7月から3年間、指定校とし採択された。

本事業の概要図

- (1) 「神山創造学」の再構築
- (2) 地域性を生かした質の高い教育環境の整備
- (3) 地域の生産・交流拠点の創出
- (4) 地域を学びの場とした実践

4 管理機関の取組・支援実績

(1) コンソーシアムについて

活動日程・活動内容

活動日程	活 動 内 容
令和元年 6 月 1 日	コンソーシアムを組織
令和元年 7 月13日	第 1 回オープンスクールと校庭マルシェ見学
令和元年 7 月13日 (第 1 回)	第 1 回会合（キックオフ会議） ・基調講話「これからの学校と地域の連携・協働の在り方」大正大学地域構想研究所教授 浦崎太郎 氏 ・「これまでの神山校の取組」と事業内容の共通理解 ・質疑応答後、今後の方針を決定
令和元年10月26日	第 2 回オープンスクール見学
令和元年10月26日 (第 2 回)	第 2 回会合 ・全体会：7 月以降の取組及び全国サミットについての共通理解 ・分科会：キャリア教育の充実に向けた取組状況と課題、森林ビジョンとの取組、耕作放棄地対策に向けた取組状況と今後の展開についてそれぞれ協議 ・全体会：各分科会での報告後、各取組の進め方を決定
令和元年11月17日	第 2 回校庭マルシェ（神農祭）見学
令和 2 年 1 月22日	課題研究発表会参加
令和 2 年 1 月22日 (第 3 回)	第 3 回会合 ・全体会：第 2 回の分科会について振り返り ・分科会：神山創造学のカリキュラム、キャリア教育の充実に向けた取組状況と課題、森林ビジョンとの取組、耕作放棄地対策に向けた取組状況と今後の展開についてそれぞれ協議 ・全体会：各分科会での報告

(2) カリキュラム開発等専門家について

活動日程・活動内容

活動日程	活 動 内 容
令和元年 7 月13日	第 1 回オープンスクールと校庭マルシェ見学
令和元年 7 月13日	第 1 回コンソーシアム会議（キックオフ会議）
令和元年10月 9 日	第 1 回会合 各事業担当教員と協議 ・「神山創造学」の再構築について、「課題研究の深化」、「キャリア教育の充実」、「他教科等と相互に関連させた指導」、「基礎学力の強化」の 4 項目で協議 ・地域性を生かした質の高い教育環境の整備について、「専門人材の配置」「スタディツアー」の 2 項目について進捗状況の確認後で協議
令和元年10月26日	第 2 回オープンスクール見学
令和元年10月26日	第 2 回コンソーシアム会議
令和元年11月17日	第 2 回校庭マルシェ（神農祭）見学
令和元年12月17日	第 2 回会合 各事業担当教員と協議 ・神山創造学の再構築について、「令和 2 年度時間割の検討」、「3 年次課題研究への接続方法」、「コンソーシアムとの連携体制」の 3 項目で協議
令和 2 年 1 月22日	課題研究発表会参加
令和 2 年 1 月22日	第 3 回コンソーシアム会議

(3) 地域協働学習実施支援員について

実施日程・実施内容

日 程	内 容
令和元年 6 月 5 日	森山・樋口氏, 第 1 回プロジェクトチーム会議に出席 ・コンソーシアムキックオフの日程と内容等を協議
令和元年 6 月22日	森山・梅田・秋山氏, 地域みらい留学フェスタ（大阪）に出席 ・参加者に対して神山校の PR 及び説明
令和元年 6 月23日	森山・梅田・秋山氏, 地域みらい留学フェスタ（福岡）に出席
令和元年 6 月29日	森山・梅田・秋山氏, 地域みらい留学フェスタ（東京）に出席
令和元年 6 月30日	森山・梅田・秋山氏, 地域みらい留学フェスタ（名古屋）に出席
令和元年 7 月13日	森山・梅田・秋山, 樋口氏, コンソーシアムキックオフ会議に出席 ・基調講話「これからの学校と地域の連携・協働の在り方」大正大学地域構想研究所教授 浦崎太郎氏 ・「これまでの神山校の取組」及び事業内容を森山氏が一部説明 ・質疑応答後, 今後の方針を決定
令和元年 7 月19日	森山・梅田・秋山, 樋口氏, 職員研修に出席 ・特定非営利活動法人カタリバ コラボ・スクール双葉未来ラボ拠点長長谷川勇紀氏による「地域との協働における活動実践等について」の講話後, 意見交換
令和元年 7 月19日	森山・樋口氏, 第 2 回プロジェクトチーム会議に出席 ・職員研修の内容を検討 ・キックオフ会議振り返りと今後の取組内容等協議
令和元年 8 月 2 日 ～ 8 月 9 日	梅田氏, 第 1 回インターンシップで巡回指導に参加 ・2 年生 3 名が参加
令和元年 8 月 5 日	森山・樋口氏, ロジックモデル打合会に出席 ・ロジックモデルの素案検討
令和元年 8 月23日 ～ 8 月30日	梅田氏, 第 1 回インターンシップで巡回指導に参加 ・2 年生 4 名が参加
令和元年 8 月26日	森山・樋口氏, 第 3 回プロジェクトチーム会議に出席 ・コンソーシアムメンバーのコメントシートへの対応及び今後のプロジェクト等について協議
令和元年 8 月28日 ～ 8 月29日	樋口氏, 「シードバンク」スタディツアーに参加 ・1 日目京都府立桂高等学校, 郡上八幡町たねのがっこう訪問, ・2 日目奈良市農家レストラン「清澄の里栗」訪問
令和元年 9 月12日	森山・樋口氏第 4 回プロジェクトチーム会議に出席 ・第 1 回カリキュラム開発等専門家会議について及び第 2 回コンソーシアム会議について協議
令和元年 9 月18日	森山・樋口氏, 耕作放棄地現地見学に参加
令和元年 9 月24日 ～ 9 月25日	森山・秋山・梅田・樋口氏, 大正大学学生との交流学习に参加 ・1 日目は, 2 年生のチームプロジェクトに参加 ・2 日目は, 1 年生の「神山創造学Ⅰ」に参加
令和元年 10 月 9 日	梅田・樋口氏, 第 1 回カリキュラム開発等専門家会議に出席
令和元年10月11日	森山・樋口氏, 第 5 回プロジェクトチーム会議に出席 ・第 1 回カリキュラム開発等専門家会議の振り返り及び第 2 回コンソーシアム会議について協議
令和元年10月16日 ～10月17日	梅田氏, 1 年生対象まちしごと体験巡回指導に参加 ・地域の事業所 22 カ所に 29 名の生徒が分かれて職場体験

日 程	内 容
令和元年10月26日	森山・梅田・樋口氏，第2回コンソーシアム会議に出席 ・分科会では，「キャリア教育の充実に向けた取組状況と課題」，「森林ビジョンとの取組」，「耕作放棄地対策に向けた取組状況と今後の展開」に分かれて協議
令和元年11月13日	森山・樋口氏，第6回プロジェクトチーム会議に出席 ・第2回コンソーシアム会議の振り返り及び課題研究発表会について協議
令和元年11月17日	森山・梅田・秋山・樋口氏，第2回校庭マルシェ（神農祭）に参加 ・今年度の「神山創造学」の展示および校庭マルシェでの調理・販売の指導
令和元年12月5日	森山氏，職員研修に出席 ・神山まると高専について，NPO 法人グリーンバレー事務局長竹内氏より説明を受け，質疑応答
令和元年12月9日	森山・樋口氏，校内カリキュラムミーティングに出席 ・次年度の「神山創造学Ⅱ」の教員配置と内容を協議
令和元年12月17日	森山・樋口氏，第2回カリキュラム開発等専門家会議に出席
令和2年1月10日	梅田・樋口氏，大阪府立松原高校の課題研究発表会に出席
令和2年1月13日	森山・梅田・秋山氏，マイプロジェクトアワード 2019 中四国サミットに出席
令和2年1月14日	森山・梅田・秋山氏，岡山県立和気閑谷高等学校の視察に参加
令和2年1月15日	森山・梅田氏，「森聞き」DVD 上映会に出席 ・1年生が三学期に地域の方への聞き書きを行うのに合わせてノウハウを学習
令和2年1月17日	森山・樋口氏，第7回プロジェクトチーム会議に出席 ・課題研究発表会，第3回コンソーシアム会議，来年度予算案について協議
令和2年1月22日	森山・梅田・秋山・樋口氏，課題研究発表会に出席
令和2年1月22日	森山・梅田・秋山・樋口氏，第3回コンソーシアム会議に出席 ・分科会では，「神山創造学のカリキュラム」，「キャリア教育の充実に向けた取組状況と課題」，「森林ビジョンとの取組」，「耕作放棄地対策に向けた取組状況と今後の展開」に分かれて協議
令和2年1月31日	森山・樋口氏，第8回プロジェクトチーム会議に出席 ・第3回コンソーシアム会議の振り返りと運営指導委員会について協議
令和2年2月5日	森山・梅田氏，地域の方への聞き書きに参加 ・1年生が4チームに分かれて実施
令和2年2月12日	森山・樋口氏，運営指導委員会に出席
令和2年2月17日 ～2月18日	梅田氏，愛媛県立三崎高等学校との交流学习に参加 ・2年生の代表7名が3年次の課題研究を行ううえで三崎高校のマイプロジェクトのテーマ設定や取組方法を学ぶことを目的に実施
令和2年2月19日	森山・樋口氏，グラフィックデザイン講演会に出席 ・1・2年生対象にデザインとは何か，商品開発の考え方についてワークショップを通して実施
令和2年2月25日	森山・梅田・秋山・樋口氏，職員研修に出席 ・松原高校の課題研究発表会，マイプロジェクト，和気閑谷高校視察，三崎高校との交流活動について報告会を実施
令和2年3月4日	森山・樋口氏，第9回プロジェクトチーム会議に出席 ・運営指導委員会の振り返り，成果概要図，報告書の進捗状況，2年後の神山校について協議

(4) 運営指導委員会について

活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年7月13日	第1回オープンスクールと校庭マルシェ見学
令和元年7月13日	第1回会合（キックオフ会議） ・「これまでの神山校の取組」と事業内容の共通理解 ・質疑応答後、今後の方針を決定
令和元年11月17日	第2回校庭マルシェ（神農祭）見学
令和2年2月12日	運営指導委員会 ・本事業の目標の確認後、「神山創造学」の再構築，地域性を生かした質の高い教育環境の整備，地域の生産・交流拠点の創出，地域を学びの場とした実践の4項目の報告後，今年度の目標指標及びアンケート結果について説明 ・運営指導委員の方より実施しただけで生徒自身の変容が見られない。「体験から経験へ」つなげていくために振り返りを行い，専門家の評価や生徒の自己評価から考えさせる場が必要との意見

(5) 管理機関における取組について

① 管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

活動日程	活動内容
令和元年6月5日	○第1回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和元年7月13日	◎コンソーシアムキックオフ会議に出席（湊・中川・寒川）
令和元年7月19日	○第2回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和元年7月30日	「徳島県内の大学と徳島県教育委員会との連携に関する連絡協議会」において本事業の取組を説明（寒川）
令和元年8月5日	○ロジックモデル打合会に出席（寒川）
令和元年8月26日	○第3回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和元年9月12日	○第4回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和元年10月9日	◎第1回カリキュラム開発等専門家会議に出席（中川・寒川）
令和元年10月11日	○第5回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和元年10月26日	◎第2回コンソーシアム会議に出席（中川・寒川）
令和元年11月13日	○第6回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和元年12月17日	◎第2回カリキュラム開発等専門家会議に出席（中川・寒川）
令和2年1月17日	○第7回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和2年1月22日	○課題研究発表会に出席（湊・中川・寒川）
令和2年1月22日	◎第3回コンソーシアム会議に出席（中川・寒川）
令和2年1月31日	○第8回プロジェクトチーム会議に出席（寒川）
令和2年2月12日	◎運営指導委員会に出席（寒川）

○：コンソーシアムのプロジェクトチームによる取組，◎：コンソーシアムによる取組

- ・プロジェクトチーム会議等において，事業全般を見通しての指導助言や事業管理，大学連携や研究開発の方向性の提案等を行った。
- ・令和元年度は地域協働学習実施支援員のうち2名を社会人講師として雇用，令和2年度は残る2名を含め全4名を社会人講師として雇用予定である。

- ・令和２年度は神山校の取組を参考に、徳島県独自に「ふるさと協働による高校教育の質の向上・充実化事業」を実施し、地域との協働・連携により高校教育の質の向上や魅力化を進める高校を支援することで、地域との協働による取組を県内の他の高校に広める。
- ② 事業終了後の自走を見据えた取組について
 - ・現在のコンソーシアムの構成員を学校運営協議会委員に委嘱し、コミュニティ・スクールとして引き続きコンソーシアムによる地域との連携・協働を進める。
 - ・地域協働学習実施支援員を引き続き徳島県が社会人講師として雇用する。

５ 研究開発の実績

(1) 実施日程

実 施 項 目	実 施 日 程											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	１０月	１１月	１２月	１月	２月	３月
学校設定科目「神山創造学Ⅰ」におけるフィールドワーク		１回	２回				２回				１回	
学校設定科目「神山創造学Ⅰ」における活動報告								２回				
学校設定科目「神山創造学Ⅱ」によるプロジェクト活動		３回	３回	１回		２回	４回	４回		５回	４回	
学校設定科目「神山創造学Ⅱ」による活動報告				１回				１回		１回	１回	
科目「課題研究」における造園土木科の活動		６回	８回			７回	８回	５回	３回	４回		
科目「課題研究」における生活科の活動		４回	７回	３回		５回	９回	６回	３回	４回		
キャリア教育充実における仕事体験							１回					
キャリア教育充実におけるインターンシップ					２回	１回			１回			
キャリア教育充実における講話			１回								１回	
他教科等と関連させた指導				１回			１回				１回	
基礎学力の強化のための「学びの基礎診断」									１回			
地域性を生かした「専門人材の配置」		３回	３回	１回			２回	２回	１回		２回	
地域性を生かした「スタディツアー」					１回							
地域の生産・交流拠点としての「シードバンク」		２回	１回		１回							
地域の生産・交流拠点としての「校庭マルシェ」				１回				１回				
地域を学びの場としての「森林ビジョン」							４回	３回				
地域を学びの場としての「耕作放棄地対策」							２回	２回	４回	４回	３回	
地域を学びの場としての「石積み修復」								２回	４回			

(2) 実績の説明

① 研究開発の内容や地域課題研究の内容について

a 「神山創造学」の再構築

「神山創造学」では、生徒が町内のフィールドワークを通じて、歴史・文化・暮らし・産業などの調査を行った。地域の将来を見据えた施策を行う行政や地域住民らと協働して、課題解決に向けたプロジェクト学習に取り組み、さらに「課題研究」に発展できるようカリキュラムを検討した。他教科等と相互に関連させた指導を行いながら、基礎学力の強化を図るとともに職業体験を取り入れ、生徒の職業観を育成した。

b 地域性を生かした質の高い教育環境の整備

各コンソーシアム構成組織の有するネットワークを活用してゲスト講師を招聘したり、環境や農林業についての考え方を深めるスタディツアーを実施して指導者の専門性を高めた。また、カリキュラム開発等専門家の指導助言を受け、学校全体の教育の質を高めた。

c 地域の生産・交流拠点の創出

地域でつないできた種のコムギを栽培し、高校内で種を保管できるよう計画を進めている。また、農産物や種苗、情報を交換する場所として本校芝生グラウンドを定期的に開放し、人が交流できる場所として「校庭マルシェ」を開催した。

d 地域を学びの場とした実践

学校の演習林や、町内の耕作放棄地、高齢者宅や石積み修復を学びの場として、教科書や実習で学んだことを生かした様々な取組を行った。

② 地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け(各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、学校設定教科・科目等)

a 「神山創造学Ⅰ」（2単位）第1学年対象

教科「農業」の学校設定科目

b 「神山創造学」（2単位）第2学年対象

教科「農業」の学校設定科目

c 「課題研究」（4単位）第3学年対象

教科「農業」の科目、総合的な学習（探究）の時間の代替科目

③ 地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習とする取組について

a 「国語総合」（2単位）第1学年対象「神山創造学」と関連した指導

- ・自ら設定した課題について調べたことを文章にまとめた。
- ・職場体験やインターンシップの依頼状やお礼状の書き方を学んだ。
- ・グループディスカッションをとおして各自の役割を理解し実践できた。

b 「科学と人間生活」（2単位）第1学年対象「農業と環境」と関連した指導

- ・食品の三大栄養素について学習し、作物の栽培と生活の関連性について考えた。
- ・微生物と発酵について地域でパンを製造している方を講師に招き、実際のパンづくりを通して学習した。

④ 類型毎の趣旨に応じた取組について

「神山創造学」では、生徒が町内でのフィールドワークを通して、地域の人との関係性を育み、地域で受け継がれてきた文化、仕事、産業について調査や研究を深め、そして地域の課題に気づき、本人が探究したいテーマを見つけ解決していくことを学んでいる。課題を解決することを一つのきっかけにして、将来の進路決定につないでいく取組になっている。さらに研究開発を進行することにより、地域との連携がより深まると、地域の人に生徒の実践が見えやすくなるとともに、本校の取組に対する地域からの評価を受けて、PDCA サイクルを構築できる。

3年間で地域の人と関わっていくことや、地域内の環境、食農、経済における地域内循環システムを生徒自ら体験することで、地域の担い手として具体的に果たすべき役割を自覚するとともに、学んだことを将来の進路に生かせる機会となっている。

⑤ 成果の普及方法・実績について

- a 課題研究発表会の開催についてのチラシの作成・地域への配布を行うとともに、課題研究報告集の編集を行った。
- b 学校ホームページに研究開発の取組内容を掲載した。
- c 社団法人つなぐ公社主催の「つなプロ報告会」や各種イベントにおいて研究開発の取組内容を発表した。

(3) 研究開発の実施体制について

① 地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

校内カリキュラムチーム（教頭、教務主任、農場長、進路指導主事、地域協働学習実施支援員）を構成し、カリキュラム等専門家会議の前に次年度の教育課程、教員の配置、「神山創造学」から「課題研究」への接続方法等について協議している。また、コンソーシアム会議には本校教員全員が参加し、それぞれが関係している分科会で協議に加わることで、生徒の実態に合わせた地域との協働が推進できるようにしている。

② 学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

連携推進事務局は、企画運営担当チーム、大学連携担当チーム、企業連携担当チーム、広報推進担当チーム、経理部の5チームからなり、学校全体として組織的な取組となるように、企画・立案や推進体制について検討を行い、実施に当たっては管理職が各チームの調整や監督を行った。

③ 学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

年度末には今年度の取組について、生徒や教職員による自己評価と運営指導委員会からの指導・助言及び本校の学校評価委員会（学校評議員、PTA）からの評価を受けるとともに、コンソーシアムを形成する大学・企業・NPO 法人・地域の保小中学校からの指導・助言等も踏まえて、次年度に向けての課題を設定し、次年度の計画を修正するなどの改善を行う。

④ カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

今年度カリキュラム開発等専門家会議を2回開催し、「神山創造学」の再構築と地域性を生かした質の高い教育環境の整備について協議を行った。また、コンソーシアム会議においても、カリキュラム開発等専門家会議での協議事項を踏まえて分科会を設け、「神山創造学」や「キャリア教育」などについて地域とどのような連携・協働が可能かについて協議した。

Ⅱ 研究開発の内容

1 「神山創造学」の再構築

平成29年度から実施している学校設定科目「神山創造学」では、生徒が神山町内のフィールドワーク等の体験活動を通じて、社会の現状や課題を学んでいる。これまでの実践を経て、課題研究への接続、他教科等との相互連携、基礎学力やキャリア教育の面で課題が見えた。

(1) 「課題研究の深化」

① 目的

1, 2年次の神山創造学での学びを生かして、3年次の課題研究に取り組むことを期待して教育課程が組まれているが、実習時間の確保等の理由から課題研究の時間を実習に充てている現状があり、生徒の認識としても教員の意識としても両科目がつながっておらず、3年間を通じたカリキュラムになっていなかった。

研究開発の初年度となる2019年度は、神山創造学と課題研究の接続の重要性や実行体制を検討することで、学校全体で認識共有を図り、再構築の必要性や方向性を探ることに重点を置いた。

② 実施内容／教職員向け

a 教職員研修

日 時：令和元年7月19日(金) 午後1時から3時まで

講 師：福島県立ふたば未来学園高等学校 学校支援統括コーディネーター 長谷川勇紀 氏

1年次「産業社会と人間」、2・3年次「未来創造研究」を同じ曜日・同じ校時に固定することで全教員が関わる体制を構築しているなど、神山創造学や課題研究のベースとなる探究学習について教職員全員で取り組んでいる学校の事例を聞かせていただいた。

b 学校訪問①

日 時：令和2年1月10日(金) 午前9時から11時まで

場 所：大阪府立松原高等学校

参加者：阿部三代、中西貴之、梅田 學、樋口明日香

課題研究発表会の様子を見学。3年生一人一人が個別のテーマを設定しており、中でも自らの生い立ちや境遇に触れたものが多く、人権教育をベースにした3年間通じての取り組みであることを目の当たりにした。発表までに文献調査や6000字の小論文に取り組んでいることなど、プロセスについても直接教員らから話を聞かせていただいた。

c マイプロジェクト・探究勉強会

日 時 令和2年1月13日(月) 午前12時から午後5時まで

場 所 岡山大学創立50周年記念会館

参加者 岩見孝宏、丸山 稔、森山円香、梅田 學、秋山千草、荒木三紗子

全国高校生 MY PROJECT AWARD2019 中四国サミットの開催に合わせて教育関係者向けに開かれた勉強会に参加し、探究学習に取り組む3校の教員ないしコーディネーターから事例紹介があった。中四国サミットでは島根県を除く205名の高校生たちが参加しており、分科会・評価員形式で進める会の様子を見ることができた。

d 学校訪問②

日 時：令和2年1月14日(火) 午前9時から11時まで

場 所：岡山県立和気閑谷高等学校

参加者：岩見孝宏、丸山 稔、森山円香、梅田 學、秋山千草、荒木三紗子

本事業採択校の1つである学校を訪問し、事業の取り組み状況について情報交換を行った。総合的な探究の時間を課題解決型探究学習「閑谷學」として1年から3年までの授業展開を行っており、ボランティアガイドなどの課題活動や学校外での学習活動と連動させていることや、

評価方法についても模索しながら開発して進めている状況などを聞かせていただいた。

③ 実施内容／生徒向け

a 課題研究発表会での発表

日 時：令和2年1月22日(水) 午前10時から12時まで

場 所：農村環境改善センター3階

3年生の発表機会に合わせて、2年生も神山創造学のチームプロジェクトでの取組を発表した。発表後は振り返りの時間を持ち、参加者からのコメントシートの内容を見たり、課題研究発表会のスタイルについて話し合った。

b 神山創造学内でのテーマ検討

日 時：3学期

対 象：2年生全員

課題研究発表会の振り返り、高校2年間の経験の棚卸し、3年生から課題研究のテーマ設定の背景の聞き取り、仮テーマでの話し合い、など課題研究に対してどのように取り組むか考えることを神山創造学の授業として行った。

④ 全体成果及び評価

- ・探究学習を核に据えて教職員全員で取り組んでいる福島県立ふたば未来学園の事例から、生徒が自ら探究活動に取り組んでいくことの重要性を再認識する機会となった。教職員の間で神山校で同様の体制を組むことができるか、難しいならばどういった体制が可能かといった、具体的な検討に向けて動き出すことができた。

(教職員のコメント)

- ・「神山創造学の成長のさせ方について、長谷川さんの話を聞いて少しイメージができたと思います。学校全体、授業担当者、個人と様々なケースで成長させることができるのだと気づきました。」
- ・「ふたば未来学園の総合学科と本校の農業科では、異なる部分が多々ありますが、共通することはいくつかあったと思います。「生徒の学びを中心に授業を組み立てていく」ということは全ての授業に共通し、全教員が常に念頭においておかななくてはいけないことだと思います」
- ・「限られた人員で関われる時間数の中で指導体制としてどのように配置できるか、シミュレーションがいる。農業科、担任の他、できるだけ教科に関係なく関わりができるように考えたいが制約も多い。」
- ・「1・2年の神山創造学と3年の課題研究の連続性は大事にしたい。2年に手法・テーマを学んで、3年で展開する。そのための学びの内容を詰める必要がある。」
- ・カリキュラム開発会議での検討を経て、神山創造学同様に課題研究にも外部人材が関わる体制を組むことを合意した。
- ・2年生が課題研究発表会に実際に発表者として参加したことで、来年は小規模な教室に分かれて開催した方が緊張しなくて良い、トイレ休憩を確保した方が良い、といった発言が出るなど、自分たちで場をつくることへの意識が高まっている様子が見られた。
- ・3年生から課題研究のテーマをどのように決めて、どのように取り組んでいったかを直接聞いたり、仮のテーマで話し合ってみる時間を設けるなど、2年生の段階から課題研究を意識する授業を取り入れたことにより、生徒たちが自分自身の興味関心やテーマを考える機会となった。付箋に書いて貼り出すなどすることによって、個々の関心ポイントが可視化され、教員側にとっても課題研究の体制を考える検討材料となった。
- ・運営指導委員から、今年度の課題研究発表会の発表内容や報告内容から神山創造学および課題研究の再構築に向けた有益なコメントを得た。

(運営指導委員のコメント)

- ・「問いを立てさせること、生徒自身が立てることは難しくても、それを教員がサポートすることが大事」
 - ・「大学教員の立場からすれば、起承転結を聞きたい」
 - ・「体験の経験化が必要」
 - ・「今は評価が弱い。権威のある専門人材からの観点評価をしてもらうこと、意味づけをしてもらうことが重要」
 - ・「教科横断とは学習内容の共有ではなく、どういった力をどう育てていくのかという物の見方を共有することに意味がある」
- ⑤ 今後の対応と課題
- ・課題研究で生徒自身が自らテーマを見つけ問いを立てて活動をしていくための、教職員および外部人材の伴走体制を構築していく。
 - ・神山創造学では振り返りの時間を重視して活動毎に取り組んではいるものの、単純な感想の共有にとどまってしまうこともある。深める問いや振り返りの型などをより精査していくとともに、学校全体で「体験の経験化」の重要性とその手法について理解を深める必要がある。

(2) キャリア教育の充実

① 生徒の進路状況について

本校生徒の進路選択はその年によって就職・進学の違いがある。就職した生徒の業種については、建設業及び製造業が毎年多数を占めている。本校を卒業してすぐに造園、農林業関係の就職をする生徒は少ない。

進学した生徒の校種については、専門学校へ進学する生徒が非常に多い。理由としては自らの資質向上に向け、資格取得を目指しているためである。

② これまでのキャリア教育の取組

生徒の職業観の育成を目指し、これまでも以下の取組を行ってきた。

・進路説明会

企業・大学・短期大学・専門学校等の方々から、職業に関する内容や希望する職種に必要な資格について話を伺い、自らの進路決定に生かす。

・企業見学

3年生の就職希望者を対象に、希望する企業の見学を行うことで就職後の見通しを立てる。

・外部講師による授業

「神山創造学」開講以前も、農業科目を中心に外部講師による授業を実施していた。主に資格取得を目指した授業を行っていた。

③ 見えてきた課題

上記に記した内容を中心に、学校教育活動全体を通して生徒の職業観の育成に取り組んだが、卒業生の状況等を企業や各種学校の方々から伺う中で以下の課題が見えてきた。

・基礎学力の定着・向上

本校生徒は学年が上がるにつれ、普通教科の時間数が減少し、専門教科の時間数が増加する。そのため、基礎学力の定着がすべての生徒に十分できていると言えない状況があった。

・進路先とのミスマッチの解消

担任と進路指導課が連携して進路指導を行っていたが、就職先、進学先の状況に対応できず、早期の離職や休学、退学をする状況があった。

以上のことから、これまで行ってきたキャリア教育を見直し、今年度改めてキャリア教育の充実に向けた取組を行った。

④ 実施内容

a 「放課後補習」の実施

基礎学力の向上を目指し、今年度から放課後補習を実施した。前期（4月～9月）は3年生を対象に国語・数学・英語・一般教養の内容から選択受講できるようにした。後期（10月～3月）は1年生が全員、2,3年生が希望者を対象に、一般教養を除く3科目について補習を実施した。農場当番や資格取得に向けた補習等もあり、毎週完全実施はできなかったが、生徒の基礎学力の定着を図ることができたと考える。

b 「学びの基礎診断」の実施

「学びの基礎診断」とは、高校生に求められる基礎学力の確実な習得と、それによる高校生の学習意欲の喚起を図るために実施されるテストである。社会で自立するために必要な基礎学力について、生徒の現状を把握した上で目標を設定するためのテストでもある。「学びの基礎診断」を通して、学力だけではなく、各自の生活習慣等についても多面的に自己理解を深めることができる。

今年度から実施を始めたため、「学びの基礎診断」の効果については今後の経過になるが、テストの診断結果をもとに、学校においても基礎学力の定着に向けたPDCA（Plan Do See Action）サイクルの構築に活用する。

c 「職業体験」の実施

「神山創造学」の授業と連携し、1,2年生が職業体験を行った。1年生は全員が10月に2日間、2年生は希望者が夏季休業中や土日を利用し、1週間程度神山町内の事業所を訪問した。1年生は、自分がお世話になる事業所に対して体験の依頼電話を自ら行った。2年生は、前年度に訪問した事業所や新たな事業所を訪問し、より長い期間の体験を行った。

最初は受け身であった生徒も、職業体験をする中で「しごと」を「自分の未来に必要なこと」と受け止めるようになった。体験後の感想にも「希望しなかったら絶対にできない体験ができた」、「働くことの大切さを知り、将来頑張ろうと思えるよい経験になった」等、職業体験が非常に充実したものであったことが伺える内容が多くあった。



⑤ 成果及び評価

3年生は「神山創造学」受講1期生である。「神山創造学」や校内外の活動を通して、自分の進路決定につなげることができた生徒が増えたと考える。オープンキャンパスや企業見学等に積極的に参加する生徒、個別に補習のお願いをしたり質問に来たりする生徒の姿も見ることができた。

2年生は早い段階から進路決定に向けて準備をすることができた。自ら意欲的に神山町内の企業を訪問したり、進路指導課に質問に来たりする生徒の姿が見られた。また、入学当初は受け身であった生徒が率先して行動する姿も見られるようになった。

1年生は「地域創生類」の1期生である。入学当初より学年全体で行動することで、コミュニケーション力や協働する力を身につけた。放課後補習についても、1年生から全員が受講することで、学習習慣の形成につながった。

⑥ 今後の課題

今年度の3年生は就職希望者が少なく、希望する企業を受験し、内定をいただくことができた。しかし、現2年生は就職を希望している者が多い。求人数も増加傾向にあるが、生徒の希望する業種の斡旋が十分できるとは言えない。更なる企業の新規開拓を行う。

また、次年度は大学等の入試制度が大きく変わる。進学を希望する生徒については、早期からオープンキャンパスへの参加を勧めるとともに、教員も積極的に学校説明会等に参加する。就職・進学に関わらず、1年生からでキャリア教育を実施することで生徒の職業観の育成に努め、進路決定に向けての指導・援助をする必要がある。

(3) 他教科等と相互に関連させた指導

① 目的

地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ、教科等横断的な学習となるよう研究する。

② 対象生徒

第1・2学年

③ 実施内容

a バターとパンの作成

日 時：令和元年7月13日(土) 午前9時10分から正午まで(第1限から第3限)

科 目：科学と人間生活

場 所：調理室

対 象：第1学年

外部講師：フードハブ・プロジェクト かまパン & ストア 笹川 大輔 氏

「科学と人間生活」でアルコール発酵を学習した際、実際にアルコール発酵を自分達の手で確かめてみようと考え、アルコール発酵を利用してパンを製造している地元のパン屋の笹川さんをお願いして授業を行った。バターは脂肪についての学習内容の中に「バターをつくろう」という課題を実際に行った。



授業の目的及び作業手順の説明



笹川氏による実践説明



バター作り



パンの成形

b 「聞き書き」の文字起こし

日 時：令和2年2月6日(木)～令和2年2月12日(水)

科 目：農業情報処理

場 所：情報処理室

対 象：第1学年

令和2年2月5日の第4限から第6限の「神山創造学」の時間に、グループに分かれて町内の名人のもとを訪れインタビューを行った。そのときのインタビューの内容全てを文字起こしするのに、農業情報処理の時間を用いて、生徒達がパソコンで入力した。

④ 全体成果及び評価

生徒は、実験・実習・作業等を伴うと、教室での座学のときよりも集中し、さらに意欲的に授業に取り組める。また、生徒同士協力し、相談しながら進めることができる。グループの中で役割分担をし、効率よく取り組めている。今年度の2科目は連携がスムーズにいった例である。

⑤ 今後の対応と課題

生徒は、「神山創造学」の学びを通して、他の科目でも生かせつつあるが、パンとバター作りに関しては「科学と人間生活」の授業であるということを忘れてしまっている生徒もいたかと思う。体験することによって生徒の記憶には残るが探究的な学びにまでは至っていない。それが今後の課題である。

また、目標とする力の育成に向けた他教科との相互連携も不十分である。次年度は今年度の2科目だけでなく、他の科目とも積極的に連携を行いたい。「神山創造学」では、学年団（授業担当者）と毎週ミーティングを実施しており、そのときに各教科（科目）との授業内容やねらいの認識共有を行い、活発に連携していきたい。また、「神山創造学」と他教科の連携だけでなく、他教科同士の連携も視野に入れて考えていきたい。

(4) 基礎学力の強化

① 目的

社会的・職業的自立に必要な基礎学力の定着を図る。また、「学びの基礎診断」の認定ツールの活用を通して、客観的に認識する。

② 対象生徒

全学年

③ 実施内容

a 小テストの実施

日 時：毎月月初めの3日間（朝のHR活動）

科 目：国語（漢字）・数学（計算）・英語（英単語）

対 象：全学年

年度当初に各科目のテキストを配布し、各月の範囲を決めて計画的に学習しテストに臨むよう指導している。全てのテストをファイリングし、復習に役立てるようにしている。また、学年末には成績優秀者を表彰し意欲喚起に努めている。

b 放課後補習の実施

日 時：月曜日・水曜日・金曜日の放課後

科 目：国語・数学・英語・一般教養

対 象：第2・3学年／希望者

第1学年／全員

1学期は3年生のみ、2学期から1・2年生の補習を実施した。3年生の一般教養は就職希望者対象のものである。

c 「学びの基礎診断」テストの実施

日 時：第1回 平成31年4月17日(水) 全学年
第2回 令和元年9月3日(火) 第2学年
令和元年12月10日(火) 第1学年

科 目：国語・数学・英語

内 容：第1学年／学研アソシエ「基礎力測定診断ベーシックコース」
(高校生のための学びの基礎診断に認定された測定ツール)
第2・3学年／学研「基礎力養成ナビ」
(認定ツールの代替となる取り組み)

対 象：全学年

1・2年生は年間2回実施した。3年生は4月のみの実施であった。長期休業中に事前学習のワークブックを学習するよう指導した。

④ 全体成果及び評価

小テストは数十年前から実施している取り組みであり、生徒の中では毎月行うことにより習慣にもなっている。また、放課後補習は今年度の新たな取り組みである。2・3年生に関しては個別による対応のため生徒一人一人の苦手な分野などを把握することができ、個人に応じた学習法を行うことができる。1年生は全員受講のため、学習習慣が身につくにつれある。

「学びの基礎診断」テストは2・3年生にとっては、定期考査以外の初めての外部テストであったが、全員が事前学習にも取り組み、受験もした。各自、自分自身の成績を確認することにより、定期考査以外での自分の客観的な学力を認識できたと思われる。1年生は、第1回より第2回の偏差値が上昇した人数の割合が69.0%と半数を超える成果が出た。

⑤ 今後の対応と課題

小テストについては、年々生徒の意欲が減退している。在学3年間で必要不可欠であると思われる内容を学習しているので、生徒には意欲的に取り組んでももらいたいと考える。放課後補習に関しては、1年生についてはほぼ全員が参加しており、学習習慣を定着させたいと思うが、教室の確保と学校行事の兼ね合いで毎週3回コンスタントに実施できていない現状がある。また、各教科担任が1名しかいないため2学級合同での実施も難しいため、次年度は補習の運営方法について検討していく必要がある。

「学びの基礎診断」テストは次年度も引き続き実施する。ただし、1年生については年間2回から3回への実施を検討している。2年生については、今年度と違い認定ツールを用いての実施が可能になるので、1年生同様に年間3回の実施を目指す。

さらに、朝のSHRでの基礎学力向上を目指しての取り組みを考えており、少しでも生徒に必要な基礎学力の定着を図りたい。

2 地域性を生かした質の高い教育環境の整備

(1) 外部人材を活用した「専門人材の配置」

① 目的

各コンソーシアム構成組織以外にも神山町は、多様な企業、NPO法人があり、多彩な専門人材を有している。環境・食農等に関する専門的知識・技能を生徒に修得させるための配置を研究する。

② 対象生徒

造園土木科2年生で今年度3級を合格し、2級受験に興味のある生徒8名

③ 連携先

団 体 名：徳島県造園業協会 会長 椎野 正敬

住 所：〒770-0847 徳島市幸町3丁目109-1 細川ビル3F

電話番号：088-653-1071

④ 実施内容

a 第1回講習会

日 時：令和元年11月6日(水) 午前9時から午後3時まで

科 目：造園技術

場 所：造園土木実習棟一階

講 師：徳島県造園業協会 会長 椎野 正敬 氏

監事 水主 圭三 氏

午前中は、2級のDVDを見ながら実技の注意すべきポイントを教わった。3級と違い、竹の向きや切る位置など細かく決まっており、職業人として知っておかなければいけない基本を教えていただいた。

午後からは、実際に石を使った敷石の方法を教わった。人が歩くための石なので石と石の向きを揃えることや平らな面を上にするなどの注意点を詳しく説明を受けた。



DVD による作業手順と方法の説明



実物の石を使った敷石の説明

b 第2回講習会

日 時：令和2年2月5日(水) 午前9時から午後3時まで

科 目：造園技術

場 所：造園土木実習棟一階

講 師：徳島県造園業協会 会長 椎野 正敬 氏

監事 水主 圭三 氏

午前中は、前回に引き続き縁石と飛石の並べ方を教わった。自分たちが並べた石を一つ一つ正しい向きに直してもらったり、敷石の表を水平にするなどの作業ポイントを理解した。

午後からは、事前練習で組み上げた四つ目垣について、審査員がチェックするポイントや見栄えをよくするための竹の向きなどを教わった。



縁石と飛石の配置についての説明



四つ目垣の作成ポイントの説明

⑤ 全体成果及び評価

生徒は、2級と3級のレベルの違いに驚いていたが、説明を聴いたり、自分で質問したりするうちに、2級に挑戦しようという意欲がわいてきたように思われる。これまで2級の合格者は、平成21年度から23年度の3年間で5名が合格しているが、指導する教員の転勤によりそれ以降合格者を出していない。今年度、学科再編を行い、地域創生類としてスタートしたが、県下で唯一造園を学べる高校として、高度な資格取得に取り組んでいることを地域の方や造園関係者に理解してもらうためにも来年度2級に挑戦し合格者が出せるよう指導していきたい。

(生徒の感想)

- ・縁石や飛石を並べるのが難しかった。飛石で流れを作ることを知った。
- ・前回は、DVDを見て説明を聴いたが、今回は実技で実際にやれたのでわかりやすかった。
- ・2級は、3級と違って竹垣の縄を結ぶのが難しく、石も重いので大変だった。

※来年度2級に挑戦したいかを聞くと「8名中5名が挑戦したい」と回答した。

⑥ 連携先からの意見

造園業界は、高齢化が進み若い人材が育っていない現状であるので、今回の講習会で生徒が熱心に参加する姿を見て、是非とも将来造園関係の仕事に就いて欲しいとの意見であった。

⑦ 今後の対応と課題

来年度の受験が10月頃の予定なので、指導する科目と教員を早めに決定し、指導計画を作成させる。そして指導を継続的に行うことにより2名以上の合格者が出せるようにしていく。

生徒は、体験を通して身につけた専門的な知識や技術を実践できる場が必要になってくる。その実践を経験することにより「深める力」が身につくと考えられるので、地域でそのような場を見つけていく必要がある。

(2) 多様な進路を実現する「教育課程の構築」

① 目的

地域との協働による探究的な学びを実現する学習を、各教科・科目や学校設定教科・科目等に位置付けることに加え、教育課程外の活動を関連させること等によって、各教科・科目等における取組を更に効果的なものとする。また、学校全体の授業改善や教師、生徒及び地域の関係機関の意識改革を促すものとなるように研究する。

② 対象者

本校教職員18名及び地域協働学習実施支援員4名

③ 実施内容

a キックオフ会議での基調講話

日 時：令和元年7月13日(土) 午後1時から午後3時まで

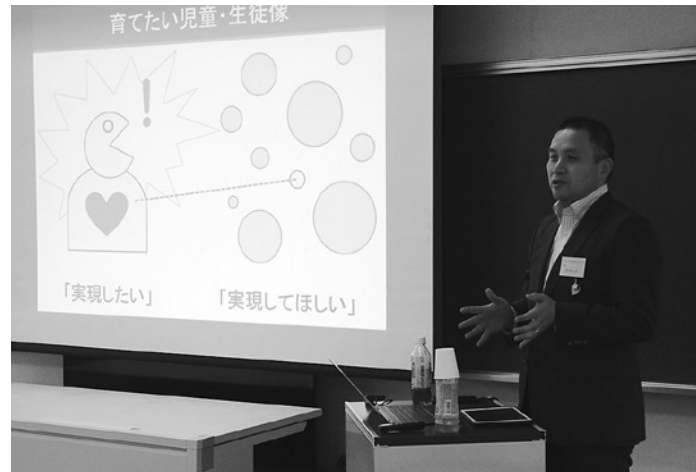
場 所：徳島県立城西高等学校神山校 本館3階視聴覚室

講 師：大正大学地域構想研究所教授 浦崎 太郎 氏

本事業に取り組むにあたって、「これからの学校と地域の連携・協働の在り方」と題し浦崎先生より講話をいただいた。

コンソーシアムとは、生徒一人一人の興味・関心と地域の課題とを効果的にマッチングさせるための事業共同体であり、今後、地域にとって重要性を増していく。

高校と地域が互恵的な関係を構築するため、新学習指導要領を尊重しつつ「高校生・教員・地域の人たちが一緒に挑戦し、関わり合いを通して皆が同時に変容していく」プロセスを描くことが求められており、教育課程が社会に開かれるには、地域との協働体制を構築するとともに、地域との協働を通して「個別最適化の学習」を進めていくことが重要との話であった。



浦崎先生の基調講話の様子

b 教職員研修

日 時：令和元年7月19日(金) 午後1時から午後3時まで

場 所：徳島県立城西高等学校神山校 本館3階視聴覚室

講 師：認定特定非営利活動法人カタリバ

コラボ・スクール双葉未来ラボ 拠点長 長谷川勇紀 氏

「生徒一人一人がマイテーマをみつけるために」と題して講話をいただいた。

東日本大震災後に多くの課題を抱えた地域で、生徒達も自分たちの将来が描けない状況からのスタートであった。そのような中でふたば未来学園高校が試行錯誤の中での取組事例を紹介していただいた。

そして学校設定科目「未来創造探究」と教科の授業を連動させながら、ループリックを使った個別面談や自己評価を実施することにより全教職員が「育成したい力」として共通認識を強く持つことができたとの話であった。

(教職員の感想・意見)

- ・「未来創造探究」が全教員が関わっていることが非常によいと思う。教員は、生徒に課題を発見させたり、解決させるための指導・助言をする立場であることを理解し、その科目について向上心と意欲をもって臨む必要がある。
- ・ふたば未来学園高校の失敗例から学んだ改善案(現在のカリキュラム)を講演していただき、本校の「神山創造学」の進むべき道が見えたように思う。
- ・「生徒の学びを中心に授業を組み立てていく」ということは、すべての授業に共通し、全教員が念頭においておかなくてはいけないことだと思う。
- ・授業を実施する際のコーディネーター役の方と教員が共通言語を積み重ねながらつくっている様子がよく分かった。
- ・「未来創造探究」のように授業のあとチームの教員でお互いの関わり方や役割分担について振り返る時間を必ず作るようにしていけたらいいと思う。

c 第1回カリキュラム開発等専門家会議

日 時：令和元年10月9日(水) 午前9時30分から正午まで

場 所：徳島県立城西高等学校神山校 本館3階視聴覚室

参加者：鳴門教育大学 尾崎 士郎 特命教授

四国大学 安永 潔 准教授

県教育委員会学教教育課 寒川 由美 指導主事

県教育委員会学教教育課 中川 望 指導主事

教職員6名及び地域協働学習実施支援員2名

概要説明でカリキュラム開発等専門家の説明と本会で協議する項目の確認と研究開発のテーマごとに説明をした。そして、カリキュラム専門家の方から次のような意見や提案をいただいた。

- 神山創造学が一般教育と専門教育とどうつながるか。学んだことがそのまま生きる場合とできない場合がある。キャリア教育の出口に向けた指導が必要である。出口と学びのミスマッチがあるが、学んでいることが業種的には違っているようで近いこともある。学んだことが卒業後の進路に生きている。そのあたりをどう評価するか。一般教科と専門教科と神山創造学。直接、あるいは間接的に影響があるか。カリキュラムが生徒のどこかで生きているとよい。ある課題を設けて体験する中で教える内容を考える。そういうことができるか、やっていいのか、やりすぎると本来の趣旨からそれないかを考え指導していくとよいのではないか。
- 農業を通して学ぶのが農業高校の現状。自営の家は少ない。農業に就職する、自営する、店でなんとかする。これからの時代は自分で仕事をみつけていく。農業を通して自分の仕事やプランをみつけていく。生徒もそうだが私たちの意識の入れ替えも必要ではないか。
- カリキュラムについて、進路に結びつけることが大事。神山創造学も3年目で、ある程度の骨格ができていると思う。つなぐ公社やフードハブプロジェクト等の人力、経済、サポートがあって展開できている。2年次からの2単位増加分をどうやっていくか。教員配置の問題、展開する上での課題もあって手探りの状態で進むしかないところもある。
- 直接農業の仕事につく人は少ない。学びがつながれば良い。計画を立てて先を見通す。自分たちがやっていることが社会に出て役立つ。振り返りの習慣も大事。学びが次の進路につながっていることを実感できればよい。

外にいったって販売をする、神山の食材を使う、神山の木を使う、いろんな形で神山とつながることはできる。そういう学びがあってもいいのではないか。先輩たちの話も聞く。高校で学んだことが生かされていることを後輩に伝える。実はつながっていることを言ってくれる人がいれば生徒も意欲的になる。

d 第2回カリキュラム開発等専門家会議

日 時：令和元年12月17日(火) 午後2時から午後5時まで

場 所：徳島県立城西高等学校神山校 本館3階視聴覚室

参加者：鳴門教育大学 尾崎 士郎 特命教授

県教育委員会学教教育課 寒川 由美 指導主事

県教育委員会学教教育課 中川 望 指導主事

教職員6名及び地域協働学習実施支援員2名

前回の協議内容を振り返り、今回、神山創造学と課題研究の連続性を持たせることを中心に協議し次の意見や提案をいただいた。

- 2年生の神山創造学が2単位増えることで「ここが充実するんだよ」「課題研究につながるんだよ」というのが分かるように説明する。せっかく従来と変わるのだからそれによって課題研究も充実する。
- イメージは沸いてきた。「神山創造学」のマイプロジェクトでスキルアップを図る内容が3年生の



カリキュラム開発等専門家会議の様子

課題研究の準備になる。何を学んでいくのかという準備期間を持って進める。アンケート調査結果を見て思ったこととつながる。農業科で学んだことが自分の進路にもつながる。このことが自分の自己肯定感につながっていく。授業における大事なことであり枠組みとして大事である。

- 今までは暗中模索だったことに光が差してきた。大学でしていることに似ている。ものづくり系と情報系。流れを見ているとチームプロジェクトである。そこから課題研究につながる。これを高校でしてるんだと参考になった。すごく身近に感じた。なかなかおもしろいと思うので、さらに充実させて欲しい。

④ 全体成果及び評価

今年度、教育課程の構築や学校の在り方に関する研修は、学習内容の充実を図り、学校の方向性を教職員や域協働学習実施支援員で共有し、地域資源を教育的目線で捉え直し、カリキュラムデザインを行うことが教職員の意識改革につながる事がわかった。

また、カリキュラム開発等専門家からは、本事業における本校の取組内容を理解するとともに、大学生が本校に随時来校して授業や活動に参加してもらうことにより、生徒の実態を把握した上で課題の分析を行い、本事業の趣旨に適した教育課程及び教育活動ができているかの指導助言を受ける体制が整いつつある。

⑤ 今後の対応と課題

地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画の取組効果を高めるための教育課程外の取組として「孫の手プロジェクト」での地域との高齢者との交流や森林女子部での生徒の活動があるが、この取組が教育課程の教科・科目との連動について十分生かしていない現状である。地域の歴史・文化・暮らし・産業について知り、その良さを他の地域に発信することができるこの取組を十分理解し、学校での生徒の活動がより主体的になるよう研究を進めていく。

3 地域の生産・交流拠点の創出

(1) 「スタディツアー」及び地域の種と苗をつなぐ「シードバンク」

① 目的

神山校および神山町でのシードバンク設置に向けた調査種は、人類が代々受け継いできたものであり、独占されたり私有化されるべきものではないが、種子法・種苗法に関する動きの中で採権が企業に渡りかねない社会情勢にある。種取りは手間と時間のかかる作業でもあり、離農とともに種が受け継がれなくなる可能性があり、個々の農家に任せているのが町の現状である。神山校が地域の固有種・固定種の保管機能を担うことは公益的意義が高く、種取りの作業プロセスから観察できる個々の種の特長、F1種の普及の背景など、農業を学ぶ生徒にとって学習素材になるものが豊富にある。

以上の背景を踏まえ、高校生とともに町内でどのような活動ができるかというのを調査するため、実際に種の保存に関する活動を行っている学校等を訪問して話を聞くことにした。

② 日程

令和元年8月28日(水)、29日(木)

③ 参加者

瀬部 裕子、草本 俊寿(神山校)

白桃 薫 ※桂高校のみ参加、大東 千恵、樋口明日香 (Food Hub Project)

鳥庭 宏(神山町役場)計6名

④ 視察先

a 京都府立桂高等学校

所在地：〒 615-8102 京都市西京区川島松ノ木本末 27

連絡先：075-391-2151

b たねのがっこう

所在地：〒 501-4217 岐阜県郡上市八幡町尾崎町 514

c 清澄の里 粟

所在地：〒 630-8411 奈良県奈良市高樋町 861 番地

連絡先：0742-50-1055

⑤ 行 程

8月28日 9:00 神山町出発（道中で昼食）

13:30～15:30頃 桂高校訪問

移動（高速利用で3時間弱）

19:30～21:00頃 たねのがっこう

宿泊先：みはらや 郡上市八幡町柳町 266

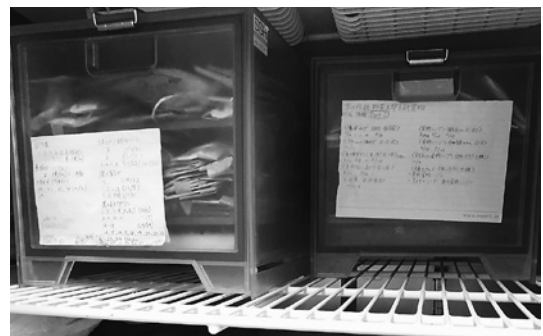
8月29日 8:30 郡上市出発

12:00～14:00頃 Project 粟 訪問

移動（高速利用で3時間強）

⑥ 視察内容

a 京都府立桂高等学校



岩木泰孝副校長からカリキュラムや TAFS の位置付けをお聞きしたあと、実際に種の管理を担当されている実習教諭の高橋智彦さんに生徒の学習内容活動頻度、具体的なシードバンクの運用事例についてお話を伺った。前任の先生から受け継いで7年目の高橋教諭が一人で管理されている。野菜はつながりのある地域の飲食店に卸しており、関係性を築いている。栽培している野菜の種は卒業生や地域の農家から種を受け継いで育てているが地域性や農家との信頼関係で成り立っているため、今後高橋教諭が異動した後の仕組みづくりは課題である。

b たねのがっこう



たねのがっこうを主催する岡本よりたかさんから、種にまつわる社会的動向、シードバンク

の必要性、具体的な運用事例を聞くことができた。地域の種を残すというより「種を採ることを日常にしていく」ことが目的。その種をつないでいくために会員制度をつくり、全国から種を集め、各地で栽培して種をとったら返してもらうという方法で種を少しずつ増やしている。

c 清澄の里 粟



農家レストラン「清澄の里 粟」を訪れ、ランチをいただきながら地域の農家との連携、農家と連携したレストラン経営、仕組みについてオーナーの三浦雅之さんにお話を伺った。1日20食、完全予約制で50品目もの野菜料理が次々と出てくる。大和伝統野菜を中心に海外の種から育てた野菜（エアルーム）も並ぶ。種の供給や保存はNPO法人営農協議会が担っており、年間120種の野菜を育てているが、完全契約栽培で全買い取り。種は3年保管（5℃で保存）し、毎年30～40種類の種を採っている。

⑦ 全体成果及び評価

全2回の報告会を通して、神山校教職員や神山町役場、神山つなぐ公社に所属する方々と視察内容の共有と今後の見通しを共有しながら、町と学校が協力しながらプロジェクトを進めていく体制がとれつつある。

a スタディツアー報告会

日 時：令和元年11月1日（金）

16時から17時30分

場 所：神山町役場

参加者：神山町役場幹部、
神山つなぐ公社理事、
同ひとづくりチーム

b 教職員向けスタディツアー報告会

日 時：令和元年12月5日（木）

15時から16時

場 所：城西高校神山校視聴覚室

参加者：神山校教職員



⑧ 今後の対応と課題

地域でつないできた種を保管し、交換しあえる場所をつくっていくために、まずはすでに取り組んでいる神山小麦の栽培から高校生と取り組んでいくことにした。設置にあたっては、町役場やフードハブ・プロジェクトと連携して仕組みづくりを行いながら、長期的には、地域種の収集や実験的な栽培も検討していきたい。

(2) 人とモノが行き交う「校庭マルシェ」

① 目 的

神山校のオープンスクール開催の中で、生徒が栽培実習等で育てた農産物を校庭で販売する「校庭マルシェ」を開催することで、県内の中学生や地域住民らに日頃の学習活動の様子や取組を知っ

てもらうことを目的とする。

② 開催実施日

令和元年7月13日(土) 午前10時から午後2時まで

③ 販売商品

トウモロコシ、トマト、キュウリ、ナス、大玉スイカ、カボチャ、ジャガイモ、

花苗、寄せ植え、山野草

町産材使用キーホルダー（森林女子が制作）

④ 販売担当生徒

3年生活科6名、農業クラブ役員8名

⑤ 実施内容

「校庭マルシェ」開催当日は、実施場所を神山校グラウンド西側の南よりフェンス付近とした。正門からすぐに確認できる場所にテント2張りを設置した。また、城西高校そよかぜ販売チームに協力いただき、本校との販売交流を実施した。



販売活動の様子



流木を利用した寄せ植え



町産材を利用して森林女子部が制作したキーホルダー

⑥ 全体成果と評価

生徒は、オープンスクールの授業の中で、このような販売活動ができて積極的に取り組むことができたように思う。自分たちで育てた農産物が、ドンドン売れていくと嬉しくやりがいを感じている。また、販売活動のなかで商品説明や商品をしっかりピーアールすることもできていた。販売活動は農業高校の場合、秋の学校祭（文化祭）を公開にして、販売活動の柱として現在も盛大に学校全体で取り組んでいるが、適期に生産される夏野菜等は、校外の販売活動が主体であったが、地域住民やいろんな方々に、まず、学校に来ていただいて、学校の学習活動の様子を見ていただくなかで、販売活動できるこの「校庭マルシェ」を次年度以降も継続させたい。

⑦ 今後の対応と課題

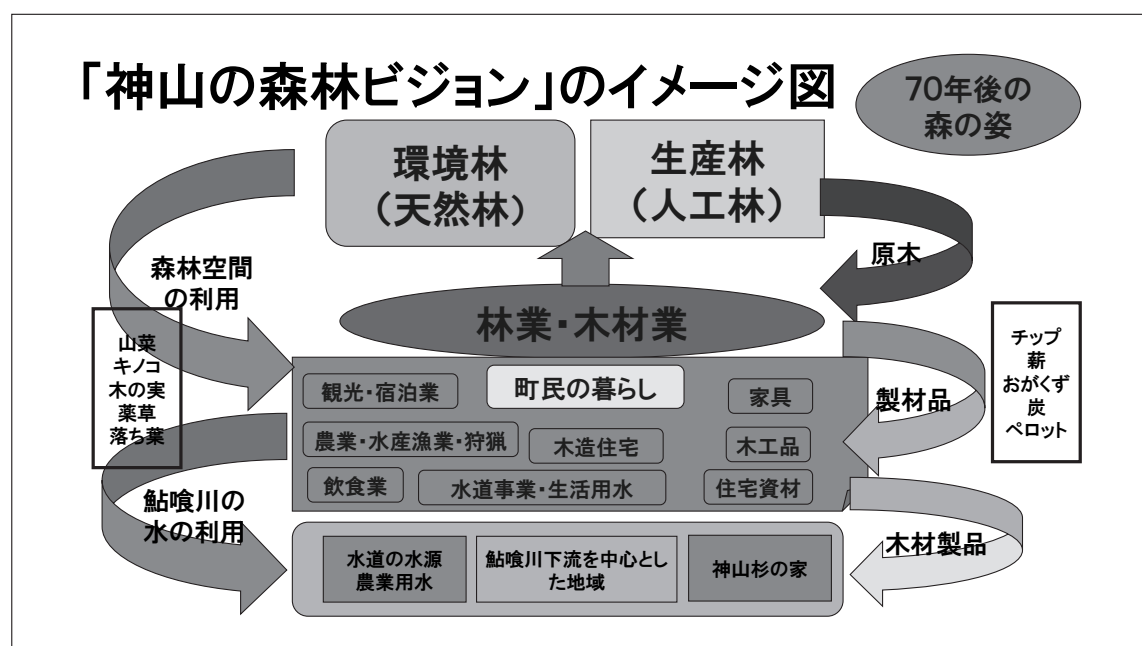
オープンスクールの開催は、学校を地域住民やいろんな方々に見ていただき、広報する機会として絶好の取り組みであり、なくてはならない取組である。そのなかで「校庭マルシェ」の実施は、より地域住民や来校者との距離を近づけることのできる意義のある活動である。生徒たちには、販売活動を通して人と通じ合い、コミュニケーションの取り方や在り方を学び、これからの活動に活かして欲しい。

4 地域を学びの場とした実践

(1) 演習林を活用した「森林ビジョン」

① はじめに

「森林ビジョン」とは、神山の森林ビジョンのことで、神山の森林は、スギの人工林が大半を占めており、林業地の様相を呈している。戦後までは多様な森林環境が日常生活を支えていた。そのような中で、外材の輸入が自由化され、高度成長と共に外材輸入が急増し国産材のシェアが低下していった。加えて、山村からは人口が都市部へ流失し高齢化により、山林の管理ができず、手入れの行き届かない人工林が増加し、水土保持機能の低下だけでなく、地球温暖化防止機能にも影響を与え、森林生態系の多様性が失われ、人里や植林地で獣害が多発するなど、生活環境や農林業の生産環境までもが悪化してきている。こうした中、神山町は国の動きを先取りする形で「神山の森林ビジョン」を策定した。未来の70年後のビジョンを公益的な森林の機能復活と木材生産のバランスがとれた神山町の森林を目指し本年度スタートさせた取組である。



森林ビジョンイメージ図

② 神山校の取組

本校は演習林を管理しており、造園土木科3年生で教科「森林科学」で週2時間森林についての授業を行い森林環境について学習している。また、部活動として森林の資源の有効活用と林業後継者不足の現状を伝える活動として「森林女子部」が頑張っている。神山町は、町にある環境林と生産林のバランスの良い森林にし、鮎喰川の良い水質の継続、森林空間を利用した観光交流、神山杉を使った家作りなど様々な可能性を加えた「神山の森林ビジョン」を策定しており、神山校も様々なプロジェクトと連携し積極的に協力している。

以下の取組が、本年度実施した森林ビジョンに係わる活動である。

a	どんぐりプロジェクト	神山既存の広葉樹を集合住宅に移植する活動
b	千年の森プロジェクト見学	上勝町高丸山人工林を天然樹林に植え替える活動
c	外部講師による環境学習	徳島大学鎌田教授の出前授業
d	ジンリョウユリ保護活動	毎年、植物バイオの授業でジンリョウユリを保護活動
e	森林女子部のSDGs発表	林業アカデミー祭で森林女子部がSDGs活動報告
f	森林ビジョンミーティング	コンソーシアム会議で森林ビジョンについて共有
g	林業アカデミー体験	1年生が林業アカデミーオープンキャンパス参加
h	森林伐木体験	神山町の森林の現状や伐木体験を大型機械で体験
i	伐木資格取得講習	2年造園土木科がチェーンソーの取扱資格を取得

③ 実施内容

a どんぐりプロジェクト（実施期間 5月から12月）

平成27年に神山町は「このまま何もしなければ人が居なくなる」という危機感のもと、地方創生戦略として「まちを将来世代につなぐプロジェクト」を策定した。平成28年度には、神山つなぐ公社が設立され7つの施策を設定しました。そのひとつに「すまいづくり」があり、平成29年度から造園土木科の先輩達が「どんぐりプロジェクト」として、つなぐ公社スタッフの赤尾さん、ランドスケープデザイナーの田瀬理夫氏などの多くの担当者の皆さんと、本プロジェクトを進めてきた。

現場施工は（5月31日、6月6日、7日、21日の合計12時間）、昨年先輩から引き継いで2期目の住宅設計チームの一員として、植栽、施工を行った。また、土木業者の昇旭建設さんと森田緑化さんらも専門人材に加わっていただき、総勢30人で取り組んだ。

結果及び考察として、「植栽、施工、管理」までの一連の作業を計画通り進めることができた。特に、測量や植栽の工事では、学校での授業の成果が生かされた。鉢上げ後の苗木の生育も順調で次回の植栽工事に引き継いでいきたい。本取組がこの神山地区の景観作りのモデル事業となることを期待している。

今後の課題として、今年度担当した3年生の施工工事は、無事に計画は完了した。今後は、後輩の皆さんに順次、第3次住宅地の植栽整備、管理作業を後輩に託す。

おわりに、本プロジェクトは、平成29年度から継続して取り組



神山町集合住宅の植栽工事で、支柱を造園土木科3年生が施工している様子

んだ。関わってくれてランドスケープデザイナーの田瀬氏をはじめ、神山つなぐ公社の集合住宅設計チームと本校生徒が力を合わせた取組となった。生徒が得た成果として、どんぐりなど鮎喰川流域の在来種の種取りから育苗、植栽、管理までの一連の流れを行い、これまでの造園土木科の授業・実習での学びを生かす場となった。そして、普段、目にすることが少ない建築業や造園業の職人の技も間近で体感できる機会を得たこと。また、プロジェクトを通して地域景観の成り立ちを学ぶ機会にもなった。今年度は、現場で竹垣を施工し、植栽整備に参加し、どんぐり等の苗木を後輩たちに引き継ぎ作業をつなげて生きたい。

b 千年の森プロジェクトの見学（10月18日）

このプロジェクトに参加する1年生「地域創生類」は2年次のコース選択、「環境デザインコース」「食農プロデュースコース」に向けて各領域で働く大人や、地域での取組を見て学びを吸収して、自身の関心を深めると共に2年次の学習活動への展開につなげる趣旨で企画をした。

徳島県立高丸山千年の森は、勝浦川の上流、那賀川町にある標高1,438mの山でブナの自然林



高丸山千年の森で、森の案内人ガイドを務めている、田中貴代さんの話を聞く1年生

が保護されている。「森の楽しみ・森で育て・森の学ぶ」をテーマに、森づくり活動や森林環境教育などを提供している。この高丸山千年の森で、森の案内人ガイドを務めている、田中貴代さんの話を聞き、2年次の環境デザインコースでの授業や、どんぐりプロジェクトでの地域性種苗による植栽工事の事前学習につなげる。

結果及び考察として、田中さんの育苗技術に驚いた。特に、素人である田中さんは自分で調べ、専門家に育苗方法を学ぶなど、独自で研究し、育苗技術を学んできたこと。生徒からは「山や森林の自然が好きになった」「森林関係の仕事やボランティアに携わりたい」などの積極的な感想が聞けたことは、このプロジェクトの成果と言える。

今度の課題として、神山の森林が台風や自然環境災害で人工林が倒れ、修復していく作業者の確保が一番重要なもんだとなる。そこで1人でも、森林ビジョンに携わる人材が生まれることが、神山町が目指す70年後の森林につながると思う。また強風や火災や土砂崩壊、あるいは人為による伐採などにより荒らされた森林を修復し更新していくためのプロセスには自然の混乱を考えて計画を進めていかなければならない。

c 外部講師による環境学習（10月23日）

高丸山千年の森プロジェクトの発起人である、徳島大学生態系管理工学研究室の鎌田磨人教授を講師に招き、地域創生類の生徒対象に、神山町の自然やグリーンライフ、自然生態系などについて、先生が小さい頃体験した話から始まり、自身の研究されたことを紹介していきました。まず自然には、「調整サービス」「供給サービス」「文化サービス」という3つの要素があるということ。神山町は人工林の比率が全国的にも高く、鳥獣被害も年々増加している。自然動物の環境が原因で、食料や住居の条件が悪化してきて、里山や農家の畑に被害を及ぼす実態が続いている。このような状況から元の里山に復元していくことが、我々人間の指名だという。また神山のような豊富な森林資源を活用して観光客を増やし、美しい紅葉や荒々しい滝の景観を見るために観光客が訪れる「文化サービス」を優先させ、地域の活性化につなげる方法もある。また、神山町は希少な植物が多数生殖しており、特に「ジンリョウユリ」が生息しており、

遠くから観察に来る人も多くなる。

結果と考察，生徒からは「神山に通いながら，地元なのに全然，希少植物の存在や価値は分からなかった」「是非探しに行ってみよう」というような感想が聞けた。鎌田先生から最後に，SDGsの推進の話で，17項目を立体で考えると最も基盤となるのが，山や海や川といった「グリーン



現在の生態系の現状を説明する徳島大学の鎌田教授

ンライフ」を守ることという話しがあり，自然の価値や自然化で起こっている問題にしっかりと目を向けこれからの学び行動に移すことが大切だと考えさせられた。この講演会を通して，生徒たちは神山町の森林へ理解を深め，自然保護への意識を高めることとなった。今後，森林自然保護活動に貢献できる人材として社会で活躍してもらいたい。

この後の課題として，次年度から森林に関わるフォーラムやセミナーに講演する講師を積極的に招いて，神山町の森林ビジョンと連携し，町が目指す人工林と自然林が5分5分になる為の知識を深めることが重要である。特に対話型のワークショップを行い，課題を解決させていく為の方法を考える人材を育成していく。

d ジンリョウユリ保護活動（5月から8月）

本校は，環境省のレッドリストで絶滅危惧IB種に指定されているジンリョウユリの増殖・保護活動に取り組んでいる。活動に取り組む生徒は，生活科2年生8名で，ジンリョウユリの球根を定植した神領上角の山林の斜面約300平方メートルで淡いピンクの花を付けたユリを毎年，確認し調査している。この調査は，1932年，神山町出身の生物科学者伊延敏行氏が神領で発見したが，人工林化や動物の食害などで自生数が減っていたため，神山校は1993年から植物バイオテクノロジーの授業で球根を組織バイオで増殖して，球根を育て山林に植えてきた。

結果と考察，生徒の感想は「ジンリョウユリの花はかわいくて，甘い香りがする。この山の一面に咲き誇るくらい増やせれるように，取組を継続していきたい」など，授業で学んだ知識で地域貢献に生かしていることが自信につながっていると感じた。

今後の課題，この活動は植物バイオテクノロジーの実験や実習をつうじて保護活動を先輩から引き継ぎ約30年間行ってきた。今後もこの活動を継続していくのが重要である。一方，無断で花を掘り取っていく「盗掘被害」もあることから他者への監視や観察の依頼が困難であることから，神山校が単独で続けていくしかない。



生活科2年生が，ジンリョウユリの調査や保護活動をしている様子

e 森林女子部のSDGs発表（11月10日）

徳島県木材利用創造センターで，本校の森林女子部が「SDGs」の推進に関わる発表を徳島県の林業関係者や森林保全に取り組んでいるNPO団体及び行政関係者に対しプレゼンター

ションを行った。

SDGsとは「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称である。2015年9月の国連サミットで採択されたもので、連加盟193か国が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた目標のことである。

結果と考察、森林女子部は、この17項目の基礎となる「グリーンライフ」の一つである山の働きの持続可能な取組に協力していることを伝えた。森林は水源の元となり、台風時は、大雨で河川の氾濫や増水で家屋の浸水という水害の原因となり、日常生活に大きな影響を及ぼすことを伝えることができたのは成果として評価ができる。そのために、私たちは、学校林で間伐や除伐等の正しい木の伐採方法を学び、伐採した跡地に針葉樹ではなく広葉樹を植えていく活動を継承していくことが、持続可能な取組に結びつくと考える。

今後の課題、まだまだ国連が目指す30年後の持続可能な取組について高校生がどれだけ理解しているか未知の世界である。今後この取組を浸透させ理解していく必要がある。次に、神山町が目標としている70年後の森林ビジョンを1年1年つないでいくことが大事であると考えた。

f 森林ビジョンミーティング（10月26日）

本事業の第2回目のコンソーシアム会議が、神山校で開催された。全体会では採択からこれまでの取組や、進捗状況などがそれぞれの担当から報告された。その後3つの分科会に分かれて詳しくミーティングが行われた。森林ビジョンミーティングでは、神山町の林業活性化協議会が策定した「神山の森林ビジョン」の概要説明があり、分科会に参加したメンバー全員が共有した。学校担当者からは、次年度の活動計画について説明があった。

今後の取組、一つ目は、森林の地表に生息する動物や土壌生物の調査と、その地域の支流となる鮎喰川の水生生物の調査を行うこと。二つ目は、演習林や製材からでる神山産材の有効利用で、「木育」をテーマについていろいろ考える取組を展開したい。

g 林業アカデミー体験（8月26日）

徳島県では全国に先駆け、平成17年度から「林業プロジェクト」を展開した。高性能林業機械の導入により、木材の生産性が大幅に向上し、若者を中心に林業従事者が増加するなど、徳島県の林業は着実に活気を取り戻している。こうした成果を基に、県は県材産を増産する目標を掲げた「新次元林業プロジェクト」を平成28年度に開始した。「新次元林業プロジェクト」は、

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGsが採択されたとき、国連が考えた17項目のカラフルなロゴ



森林女子部が徳島県内の林業関係者にこれまでの取組を紹介している様子



森林ビジョンについて、分科会の報告を伝えている様子

現場の即戦力となる人材を育成する「とくしま林業アカデミー」を開講した。「とくしま林業アカデミー」は毎年8月に設置のねらいや研修の状況、今後の期待について、徳島県林業戦略課の方がオープンキャンパスを開講している。

神山校は、演習林が有り、森林の授業や総合実習で間伐体験や、取材作業を実施している。また、2年生には造園土木科が伐木責任者、チェーンソーの資格取得を行っている。こうして林業体験を行い林業従事者への道もあることを伝えるなど、進路選択の幅を広げるため1年生がオープンキャンパスに参加している。

結果と考察、神山校から先輩が2人、林業アカデミーを卒業し、林業関係の職場で即戦力として活躍している。進路希望調査をとっても2年生が2名、1年生が2名、林業関係の仕事に就きたいと意欲を示している。また、課題研究のテーマを決めるとき、木工作品を作りたいと希望した生徒が18人中9人も手を上げ、木に関係したテーマを設定する生徒が50%もいることに驚いた。先輩が、木で何かものづくりをしているのを見て、興味がわいて来ている。自分でもできると感じている生徒が増えてきているのも現状である。

今後の課題、「林業の未来には若い力が必要」、アカデミーは林業を志す若者たちの就職先となるのが、県内の森林組合や林業関連会社、育林から伐採まで、会社によって事業内容もさまざまであり、継続性がない。「山に入ると、伐採期を迎えた木でびっしりと埋め尽くされている状態となっている。木材生産量の増産を実現するためには、新しい担い手の力が欠かせない」と話す林業会社の経営者もいる。「業界内では、新しい人材を求めている企業が多くあるが、ある程度の基礎知識を持った新人が入社してくれるのは本当に有り難いこと。機械を扱うための資格取得や、安全性への配慮などを学ぶことができる林業アカデミーの存在は、今後ますます重要になるはずです」という意見もある。



林業アカデミーオープンキャンパスで高性能林業機械の操作をする1年生

h 森林伐木体験（10月17日）

毎年、林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合が協働で、高性能林業機械の操作方法を、学校林や神山町の県有林で作業体験を3年生にさせていただいている。山林で、伐倒・木寄せ・造材を行うハーベスターや、玉切りにして運搬車に乗せるプロセッサーと運搬するフォワーダの運搬操作を体験した。現場では、高性能機械の作業工程の留意事項や高性能林業機械を用いた作業システムについて指導を受けた。チェーンソーによる伐採方法では、小系木の伐採方法について間伐材を使って実際に倒木した。

結果と考察、大型の高性能林業機械の操作は学校の演習林では体験ができないので、毎回学校にとっては貴重な体験としてとらえている。生徒も「良い経験になって、すごく楽しかった」といい感想があった。集材作業も、機械なので目的の場所に楽に設置でき、安全で安心して作業ができることに感動していた。



高性能大型林業特殊機械「プロセッサー」の操作を学ぶ造園土木科3年生

間伐が容易にでき、安全な実習地が確保でき、役場の方や県の林業関係者の方も良い場所と推奨してくださり、演習林の良い有効活用となっているが、実際に木を運び出すとなると、容易に集材できない、現在は1m程度の丸太にして人力で運んでいる。こうした集材作業が今後の課題となり、支援や助成してもらいたいところである。

i 伐木資格取得講習（12月5日）

林業における労働災害の60%は、チェーンソーを用いた伐倒作業中に発生している。いずれの作業でも作業に着手する前の準備は大切だが、特に伐木造材作業では、林分の状況、地形などの作業条件を把握することが極めて重要である。こうした、林業の作業知識を十分に把握し、定められた規則を的確に守る目的で、毎年、2年生が徳島県林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合神山支部の協力の基、学科一日、実技講習一日の合計2日間に渡る講習を受講している。

結果と考察、服装と保護具の重要性を学んだ。安全の第一歩は、服装からとも言われ安全で清潔で身軽なものを使用すること。特に山の作業なので派手で目立つカラフルな色が最適であることを学んだ。作業道具の準備も重要で、林業作業を行う前には、作業を行う林分の事前踏査やその結果を踏まえて、必要な作業道具をそろえておくことが大切である。使ったら元の位置にかたづけるという心構えが重要である。また、悪天候時の作業では、強風、大雨、大雪などの悪天候のため危険が予想されるときは、作業を中止すること。労働安全衛生法規則第483条に「悪天候時の作業禁止」と記載されている。もちろん、緊急連絡体制も災害発生時等の緊急時における緊急連絡体制の整備、確立を図ることその他、熱中症予防対策、火災予防対策、ハチ刺され予防対策、危険な毒中植物や野生動物に十分認識を持って心がけて伐木作業を行わなければならないことをこの講習で学んだ。

今後、学校林での安全な作業確保のためこの講習を継続していく必要はある。引き続き、徳島県林業木材製造業労働災害防止協会徳島支部と徳島県中央森林組合神山支部の協力が不可欠となる。



2日間にわたり、伐木講習を受講する造園土木科2年生

④ ふりかえり

神山の山は、かつて林業が盛んであった頃、私たちの先輩達が子や孫を想い、将来のために材としての木をたくさん残してくれた。一方で、神山町の人口減少や林業の市場を取り巻く環境が変わっている中で、林業のみで山を考えることはどうかという話も聞く。当時の選択について否定するつもりはなく、今だから気づけることもあると思う。生徒達によく問うのは、今を生きる我々にできるのは、これらをどうとらえてどう将来に残していくのか。また、神山町では、今の山をよりよく将来に残して行くため、今後、山とどう向き合っていきたいと考えていくかと質問する。生徒は「今ある知識だけで考えず、山がもたらす周辺環境への多様な影響、資源としての可能性など、将来を見据えどのような山が神山町にとって望ましいか、視野を大きく広げいろんな大人の意見や、高校生の意見を共有し、考えることが大切だと思っています。」という、献身的な前向きな意見が出た。そのための第一歩として、この「神山の森林ビジョン」との連携、今、山に携わる様々な人に来てもらい、それぞれの視点からの話を聞くことで、山について新しい気づきが生まれる場になればと考えている。

⑤ 今後の展望

新たな森林ビジョンの連携として来年度は、森林の生育に関わる神山町の山や川の調査を計画する。人工林と天然林の土壌に影響する光の強さと光合成速度や温度と林木の生長と水の循環について専門的な立場の指導を得て学習して行く。専門的経緯のある大人から学習意欲や、課題に向かうプロセスを評価してもらい生徒、一人一人に自信を付けさせることが2年目の展望と考える。

また、神山町の林業活性化協議会は「神山町バイオマス利用促進協議会」を今年度、新たに立ち上げ、神山町の燃焼機械導入状況調査を実施している。本校もこの調査に協力している。町は、国の山村活性化支援交付金を活用して木質バイオマス利用促進の取組を行っており、その一環として燃料機械導入の現状調査を神山町の公共施設や団体企業・民家等に調査を先駆けて実施している。将来的には、現在使用しているボイラー・ストーブ等の燃料機械の使用から神山産の木質バイオマス燃料を促進させ、限られた燃料資源の分散利用に協力し持続可能なSDGsの推進に協力していく目的で今後も、城西高等学校神山校も森林ビジョンと連携を図り、全国のモデル校となれるように頑張っていく。

(2) 6次産業化を学ぶ「耕作放棄地対策」

① 目的

農業の後継者の減少に伴い、町内の耕作放棄地は増えていく一方である。本校教職員、役場職員、フードハブ・プロジェクトの社員らとのシードバンクの視察を経て、まずは神山小麦を栽培することにした。神山小麦は神山町で70年以上継いでこられた種である。神山小麦を栽培、加工、販売しているフードハブ・プロジェクトと連携しながら、6次産業化の視点も取り入れた実践的な学びが可能になると考えた。神山小麦を栽培するにあたり、本校から徒歩10分弱の場所に位置する耕作放棄地を借り受けた。耕作放棄地の整備、管理から神山小麦の栽培、加工、販売まで、地域の景観保全と農作物の6次産業化の両観点でより実践的な活動が可能になると考える。



② 対象生徒 地域創生類1年生、生活科と造園土木科混合の2年生

③ 実施内容

a 5月29日 収穫（種をつなぐ）



b 6月12日 小麦の選別



c 9月24日, 10月15日 草刈り

神山創造学の時間に2年生によるチームプロジェクトで実施した。



d 10月26日 コンソーシアム会議

参加者 後藤, 桴谷, 白桃, 中川, 岩見, 細川, 草本, 中西, 松田, 樋口

草刈りに労力を要する現状の共有, 獣害対策の必要性を町長や役場職員, 神山つなぐ公社, フードハブ・プロジェクト, 本校職員らで共有した。

e 11月15日

神山町役場 農業委員会による一斉耕起を実施した。

f 11月21日 石積みと野焼き



g 11月27日 石積みの授業

(講師 金子玲央さん)

雨天のため, 急遽室内での実習に変更。「石積みは農家の技術」という話を聞き, 石を積みながら現地での具体的なイメージを膨らませる時間になった。



h 12月13日 石積みと神山小麦の播種



i 1月16日 獣害対策のための電柵設置

(講師 鳥庭 宏さん)

講師に鳥庭宏さん(神山町役場)をお迎えし、小麦畑の周囲に電柵とカメラを設置した。



j 1月22日 コンソーシアム会議

参加者 後藤、桴谷、佐々木、中川、岩見、細川、松田、大東、樋口

現状の共有と、収穫、加工、販売までの今後の見通しを話し合った。さらに加工、販売に向けて、町内にある施設でどのようなことができるかを検討した。

④ 全体成果及び評価

「耕作放棄地」を借り受け、役場や地域の方々に協力をいただきながら「石積みの修復」と「小麦の栽培」が始まり、すでに耕作放棄地がある谷地区の風景が1年前とは変わってきている。「環境」「食農」の概念を取り入れたプロジェクトとして今後も継続が可能であるから、農業科目を中心に教科横断的なプロジェクトとしてカリキュラムの体系化が必要であると考え。役場の職員、専門家(石積み)、地域の方(農業委員会含む)、フードハブ・プロジェクト等、地域内外の人と関わる機会が得られたことも大きく、様々な立場の人が畑を見ながら高校生の活動を見守ってくれている状況がある。

⑤ 連携先からの意見

2回のコンソーシアム会議では、取り組みに対して「がんばってほしい」「協力していく」などの前向きな意見が多く出された。天候不順や獣害等の課題を乗り越え、収穫後の収量がどれくらいか、見通しをもった話し合いができるといいという意見も出された。

一斉耕起に入っていたいただいた農業委員会の方々からは「高校生がこの畑を使ってくれるのならワシらもがんばらないかん」という声が聞かれ、地域の人たちにとって期待されている活動であることも伺える。

⑥ 今後の対応と課題

今後は「伝える力」「協働する力」「深める力」「基礎学力」と「専門的知識・技能」の習得状況、プロジェクトを通して身につけられる力について言語化し、他教科と連携しながら3年間を見通した体系的なカリキュラムを作成していく必要がある。

収穫を迎える小麦の加工や流通、販売に向けて施設や環境整備を行ったり、6次産業化に向けた教育環境の拡張をはかっていくことと、森林ビジョンに関する取組やジンリョウユリの保護活動等においても、耕作放棄地を実践的な学びの場としての活用が可能か検討していきたい。

(3) 地域の景観保全を担う「石積み修復」

① 目的

高齢化が進むにつれ、神山町の大切にしてきた景観の一つである石積みの崩れがみられる。石積みは、神山町の生活にはなくてはならない存在である。そこで、生徒が石積みの技術を習得し、神山町の景観保全に貢献できることを目指した。

② 対象生徒

神山創造学で、全校生徒は石積みの技術を学んでいる。さらに、孫の手プロジェクトに参加している生徒が町内の要望により、石積みの修復を実施している。

③ 実施内容

a 耕作放棄地の石積み

日 時：令和元年12月13日(金) 午前9時から正午まで

科 目：神山創造学 1年生

場 所：まめのくぼ

本校は耕作放棄地を整備し、小麦の栽培に取り組んでいる。この日は、地元の町民とともに、石積みの修復活動を行った。事前に、石積みになる大きな石を確保し、石を砕きながらぐり石を作っていた。石の角度や積み方に試行錯誤しながら、生徒が協力して取り組んでいた。また、町民の方の指示を受けながら、こつこつと仕上げる生徒もあり、その完成度に満足していた様子であった。



石積みの石を積んでいる様子



作業に取り組んでいる様子



完成した石積み



集合写真

b 孫の手プロジェクト

日 時：令和元年12月24日(火)、25日(水) 午前9時から午後4時まで

生 徒：造園土木科2年生・3年生 4名

場 所：西上角

本校は、町民からの要望により、庭園の整備・庭の樹木の剪定などを生徒がお手伝いする活動を実施している。この日は、生徒4名が、段々畑の石積みの修復に取り組んだ。依頼された方は、神山の石を使った石積み希望しており、本校生徒の作業の様子を頼もしく見守っていた。



石積みの様子



石を積みあげている様子



作業の指示を受けている様子



作業に取り組んでいる様子

生徒は、造園土木科で学んできた技術を生かすことができ、石積み学校 金子玲大氏の指導のもと、2日間で完成させることができた。

④ 全体成果及び評価

生徒は、授業などで学ぶ技術を実践できる場があることから、地域に貢献できることへの喜びを感じている。地域と連携することで、地域の課題を解決していこうと行動する生徒もいる。とくに、孫の手プロジェクトは地域からの期待もあり、要望は多いので、このような場で学びを発揮することができることは、本当に素晴らしいと感じている。町民から感謝されて帰宅する生徒は、どの子も達成感に満ちた様子である。このような活動から、自己肯定感が育まれ、日頃の学校生活も充実したものへと繋がると考えられる。

⑤ 今後の対応と課題

石積みの技術を指導する教員や指導者の確保、地域と学校を繋げている「神山つなぐ公社」との連携が重要である。今後も一人でも多くの生徒が、石積みに興味を持ち、石積みの修復を積極的に担い、神山町の景観保全に貢献できるように取り組んでいきたい。

Ⅲ 「神山創造学」の取組

1 地域創生類 1 年

(1) 神山を知るためのフィールドワーク

① 目 的

神山町内の聞き取り調査やフィールドワークを通して、その歴史・文化・暮らし・産業などについて調査を行い、里山の景観保全や中山間地域における農業生産をはじめとする町内の現状や課題について理解を深める。

育成したい力

他者と関わりながら自分の頭で物事を捉えていくための基礎的な力

- a 伝える力：自分の感情や考えを言語化・視覚化することで表現し、発信する力
- b 協働する力：多様な他者や価値観と関わり、対話を通して物事を進める力
- c 深める力：体験から内省を通して教訓や課題を獲得し、探求・解決する力

② 受け入れ事業所および訪問先

- ☐ 神山町役場
- ☐ KAMIYAMA BEER
- ☐ フードハブプロジェクト・かまパン&ストア
- ☐ 岩丸百貨店
- ☐ 豆ちよ焙煎所
- ☐ Sansan 株式会社
- ☐ ユサンピザ
- ☐ 株式会社えんがわ（えんがわオフィス）
- ☐ 魚屋文具店
- ☐ リヒトリヒト カミヤマ
- ☐ 大栗山
- ☐ 雨乞いの滝

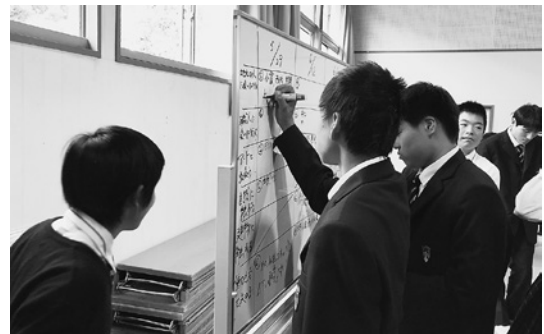
合計 12 ヶ所

③ 実施内容

a 事前学習（フィールドワークについて説明、フィールドワーク先決定）

日 時：令和元年 5 月 8 日（水）

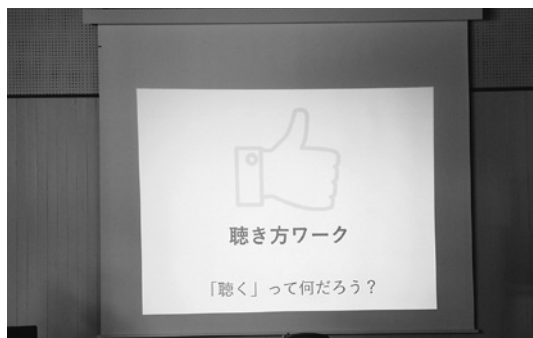
生徒たちには、フィールドワークを行う意義を説明し、いくつかの候補地から興味関心が高い所を 3 つ選択するように指示した。また、フィールドワーク先に人数制限があるため、超えた場合は生徒間で相談させて決定した。



b 事前学習（聞き方ワーク）

日 時：令和元年 5 月 15 日（水）

生徒に 2 人組をつくらせ聞き役と話し役を交代しながら行った。その際、聞き役には話をつまらなそうに聞くことや話し役の目を見ないなど話し役が話にくい条件を設定し行わせた。そして、良い聞き方を考えさせ、「聞く姿勢」を意識させた。



c フィールドワーク

日 時：令和元年5月29日(水)・6月12日(水)・26日(水)

生徒たちは5つのグループに分かれ、人・自然・アートなど神山町に散らばるさまざまな刺激に触れながら活動した。全員大きなトラブルもなく、それぞれのフィールドワーク先で有意義な時間を過ごした。



大栗山（アートに触れる）



ユサンピザ（働き方を考える）



岩丸百貨店（地元の人に会う）



雨乞いの滝（自然に触れる）

d 事後学習（体験の振り返り・共有）

日 時：令和元年5月29日(水)・6月12日(水)・26日(水)

フィールドワーク後、心に残った写真を見せながら心に残った理由やその時の気持ちなどをグループ内で発表させた。



④ 全体成果及び評価

生徒たちは神山創造学を通し、クラスを越えて自由闊達に話し合える関係をつくることができ、フィールドワークや振り返りの中で、「聞く」「書く」「話す」などの基本的なスキルの重要性を実感しているように感じた。また、学校内外でさまざまな大人に関わりを持ったことで、「自分たちが地域に歓迎されている」と感じたようである。

(生徒の感想)

- ・ まちの色々な場所に行けてよかった。色々行ったことで、神山町の昔と今の違いを垣間見ることができた。
- ・ フィールドワークは自分の興味がある分野を選択することができるので、本当に好きなことを学べた。また、そこから視野を広げることもできた。
- ・ 実際にさまざまな人の話を聞いて、一人ひとりが神山にいる理由やそれぞれの思いを知ることが出来て面白かった。創造学のおかげで神山の魅力をたくさん知ることができて良かった。
- ・ 自分の意見が積極的に言えるようになった。

⑤ 今後の課題

経験したことをまとめ生徒全体に発表する時間を確保できなかった。同じ経験をしたグループでのみ発表するかたちになってしまい、その他のグループから「他の班のことも知りたい」や「あの人の話が今になって聞きたい」などの意見があった。全体に発表することで、より大きな「共有」を経験することができ、さらに印象が強い振り返りになったと考える。また、話を聞かせて頂いた方々へのお礼を改善したい。フィールドワークを行ったのは平日であったため、本来であれば営業等をしている時間を頂いて生徒たちは活動していた。そのため「ありがとうございました」と言って学校に戻るだけでなく、お礼方法を考える必要があると感じた。

(2) まちぐるみしごと体験

① 目的

2日間の就業体験プログラムを通して、自身のキャリア選択の幅をひろげ、また実際に働く大人へのインタビューにより、仕事への向き合い方や価値観などを聞き、人生観や仕事感を養うことを目的とする。また、単に仕事を体験するだけに留まらず、受け入れ事業者と高校生の間に関係性が作られることを大切にする。

② 受け入れ事業所

- | | |
|---------------|-----------------------|
| ○徳島中央森林組合 | ○フードハブプロジェクト・かまパン&ストア |
| ○株式会社えんがわオフィス | ○道の駅「温泉の里神山」 |
| ○荒井工務店 | ○神領小学校 |
| ○広野小学校 | ○広野保育所 |
| ○下分保育所 | ○神山中学校 |
| ○ゴミサンク | ○神山スキーランド |
| ○豆ちよ焙煎所 | ○めし処萬や山びこ |

- かじかの郷
- 神山町役場
- 徳島県動物愛護管理センター
- 作家／西村佳哲
- 建築家／赤尾苑香
- すだち園
- 名西消防組合神山消防署
- 神山モータース
- カメラマン／生津勝隆

合計 23事業所

③ 実施内容

a 事前学習（体験先選択、自己紹介カード作成）

○日 時 令和元年9月18日(水)

生徒たちには、特に各体験先に人数制限を設けることなく、興味関心が高い所を選ぶように指示を出し、体験先の選択を行った。そして、体験先に渡す自己紹介カードを作成した。

b 事前学習（質問を考える、電話のかけ方を確認する）

○日 時 令和元年10月2日(水)

体験先でのインタビュー用に質問を考えた。また、インタビューを行う前には、必ず、インタビューの目的（働く大人の人生観や仕事観を知り、進路選択時の参考にする）や内容の使用目的（他の生徒の前で報告する）なども事前に説明するように生徒たちに指示をした。体験先への事前打ち合わせを生徒自身が電話で行うため、電話の応対方法やかけ方などを全員で確認した。さらに、各自が電話を体験の前日までに必ず掛けることも確認した。

c 最終オリエンテーション

○日 時 令和元年10月15日(火)

日誌を配布し、記入の仕方を説明した。また、体験先での注意事項や準備物、心構えや目的などを全員で確認した。

d しごと体験

○日時 令和元年10月16日(水)・17日(木)

生徒たちそれぞれの体験先に集合し、2日間のしごと体験が始まった。全員大きなトラブルもなく、それぞれの体験先で有意義な活動を行った。



フードハブプロジェクト・かまパン&ストア



名西消防組合神山消防署



豆ちよ焙煎所



ゴミサンク

e 事後学習（体験の共有、お礼状の作成）

○日 時 令和元年10月23日(水)

4人1組のグループに分かれ、写真を見せながら、何をしている会社でどんな体験をし、何を考え感じたかを他のメンバーに話し、体験を共有した。お礼状の書き方を説明し、お礼状を書いた。

f 事後学習（体験発表準備）

○日 時 令和元年11月6日(水)・13日(水)

発表の目的（伝える力、深める力を鍛える）を説明し、発表方法や時間などを伝えた。発表原稿の作成を行い、発表で使用する写真を選んだ。また、伝える力を鍛えるために授業の最後に2人1組になり、授業で行ったことを伝え合う活動を行った。

g 事後学習（体験発表）

○日 時 令和元年11月20日(水)・27日(水)

生徒たちを15名と14名の2グループに分け、そのグループのなかでも前半（20日）と後半（27日）に分かれ、発表を行った。それぞれの持ち時間は約10分（発表6分間、質問2分、フィードバックカードの記入2分）である。もし、発表の時間が6分以下なら、公社スタッフや職員が質問を行い、内容を深めていけるように支援した。



体験発表の様子



体験発表の様子

④ 全体成果及び評価

生徒は、興味関心の高い体験先を自分で選んだことにより、主体的に体験に取り組むことが出来ていた。また、事前学習の時間をしっかり確保したことで、しごと体験への心構えが出来たように思われる。さらに、事後学習で他の生徒たちに発表することでしごと体験にただ行っただけではなく、体験したことによる考えや気持ちの変化などにもきちんと向き合えていたように思う。（生徒の感想）

- ・もう一度、しごと体験をやってみたいと思った。私にとってとても素晴らしくいい体験になりました。
- ・今回のしごと体験で私が手に入れたものは、新しい価値観とモノに対するもう一つの見方です。この経験を生かしてこれからの人生を自分が満足していける人生にしていきたいです。
- ・2日間があっという間に過ぎました。僕にとっては言葉で表せないほどのたくさんの知識と勇気をもらったすごく良い体験になりました。

⑤ 今後の課題

体験先が神山町内の端から端までと広範囲に渡っていたので、体験中の巡視がなかなか行き届かない場所が出来てしまった。生徒の安全確保や体験先での活動を見守るためにも、教員の配置をもう少し工夫するか、体験先の設定範囲を限定する必要がある。また、事後活動で書いたお礼状を今回は、教員が各体験先に届けたが、生徒たちの中からは「自分で持って行きたい」や「もっと違う形でお礼がしたい」などお礼状ではない方法も考える必要がある。

(3) 地域の方への聞き書き

① 目的

1, 2 学期の神山創造学の地域でのフィールドワークやしごと体験を経て、生徒がさらに詳しく調べてみたいと興味・関心を持った様々な分野で活躍する神山町の名人を訪問し、インタビューや対話した内容を「聞き書き」という手段を用いて、生徒の理解を深めることを目指す。また、聞き書きした内容をビジュアル化等によって表現し、発表することで、伝える力を身につける。

② 連携先

生徒の希望が多かった5つの分野を決め、神山つなぐ公社がインタビューする方を選定してくれた。

- a 神山の農業 白桃 淑行さん、正枝さん夫妻
- b 神山の林業 竹内 浅善さん
- c 神山の食文化 海老名良子さん
- d 神山の現状 岩丸 潔さん
- e 神山の暮らし 松本 吉郎さん

③ 実施内容

a 事前学習

[令和2年1月15日(水) 5, 6限]

「聞き書き」についての説明をした後、「森聞き」という映画を鑑賞した。鑑賞した後、感想文を書いた。

[令和2年1月23日(木) 6限]

生徒の関心に従って、聞き書きをする5つのグループ（神山の農業・神山の林業・神山の食文化・神山の現状・神山の暮らし）のメンバーを決めた。

[令和2年1月29日(水) 5, 6限]

なぜそのテーマを選んだかについて個人で考えたり、2年前に生徒が実施した聞き書きの作品や資料を読み、グループ毎に名人への質問事項を話し合い、決めた。

b インタビュー本番

[令和2年2月5日(水) 4, 5, 6限]



食文化チーム（こんにゃく作り体験）



農業チーム（インタビューする様子）



現状チーム（インタビューする様子）



林業チーム（インタビューを終えて）

連携先の名人のもとを訪れ、名人からの説明を聞いたり、インタビューを行った。インタビューの内容は、全てICレコーダーや生徒の携帯電話で録音した。

c 文字起こし作業

[令和2年2月6日(木)～2月12日(水)]

神山創造学以外の情報処理の授業やホームルームの時間も使って、インタビューの内容を聞きながら、パソコンに入力した。グループによってはインタビューを時間で区切って分担するなどし、全員で協力して仕上げた。

d 事後学習

[令和2年2月19日(水) 5, 6限]

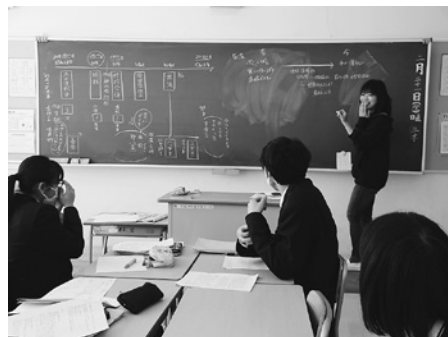
文字起こしした文章をグループで丁寧に読み込み、疑問を持ったところや印象に残った言葉を話し合い、インタビューで名人から聞いた内容を整理した。

[令和2年2月26日(水) 5, 6限]

グループ毎にインタビューの内容を模造紙にまとめた。時系列で年表にする班やキーワードでまとめていく班など様々な形態が見られた。



現状チーム（まとめ方の話し合い）



暮らしチーム（年表にまとめる様子）



食文化チーム



農業チーム

* 令和2年3月2日(月)より3月24日(火)まで、新型コロナウイルス感染拡大予防措置で学校が臨時休校となったため、以下は実施予定だった内容を記入している。

[令和2年3月4日(水) 5, 6限]

5限目は発表準備など、6限目に全グループの発表をする予定であった。

[令和2年3月17日(火) 2, 3限]

名人を再訪問し、さらに詳しく質問したり、お礼を伝える時間とする予定であった。

④ 全体成果及び評価

自分が興味を持った分野についての聞き書きであったため、積極的に質問したり、真剣に話を聞くなど、ほとんどの生徒が意欲的に取り組んでいた。また、各自でインタビューを録音し、文字起こしをしなければならないという責任もあり、生徒の主体性も見られた。ただ、突然の臨時休校で、予定していた発表や名人の再訪問が今のところ実施できていないので、正確には評価しがたい。

⑤ 今後の対応と課題

生徒たちのパソコン入力スピードに個人差が大きく、また文字起こしという作業に慣れていないため、想像以上に生徒は苦戦していたように見えたが、自分が聞いた内容を自ら文字にしていくなかで作業には大きな意義があるので、今後も継続していきたい。ただ、神山創造学の授業だけでは時間が足りないため、他教科と連携して時間を確保していくことが今後必要である。また、昨年とは違い、スマートフォンを活用して音声を記録したり、メモ機能を使うなどの手法は有効であった。実施できなかった発表や名人の再訪問に関しては、来年度に是非実施し、もう一度きちんと評価を行いたい。

2 造園土木科・生活科 2 年

(1) 国際交流チームプロジェクト

① 目的

まちの将来世代である子どもたちが、他国の暮らしや働き方に触れ、またその土地に生きる人々との交流を通して、多様な文化や価値観に対する理解を深めるとともに神山や自分を見つめ直す、「世界」と「他者」と「自分」を学ぶプロジェクトである。

② 対象生徒

神山創造学 2 年生、造園土木科・生活科生徒 7 名を中心に企画し、全校生徒がオランダ中高生と交流する。

③ 実施内容

国際交流オランダ中高生受け入れプログラム（オープンスクール）

日 時：令和元年10月26日（土） 午前 9 時から正午まで

科 目：神山創造学・生物・剣道・空手道・書道・茶道

場 所：神山校

本校がオランダのピーテルフルン中高生と国際交流をするのは、今年で 3 年目である。今年度は、神山創造学の授業で受け入れプログラムを企画・運営し、まとめていくプロジェクトを実施



自己紹介の様子



空手道の授業風景



書道の授業風景



茶道の授業風景



調理実習の様子



集合写真

した。神山校ならではの実習や日本の文化を体験できるような授業を考え、いろいろなアイデアが出た中で、海外にはない「お弁当」文化を教えてあげたいという意見がでた。そこで、お弁当の定番メニューである「卵焼き」「おにぎり」という日本の伝統的な料理と一緒に作るようになった。

当日は、オープニングセレモニーの進行や調理実習の準備など、それぞれの役割の中で、自分のやるべきことを理解し行動することができていたと思う。和やかな雰囲気での国際交流ができていた。

④ 全体成果及び評価

神山創造学で育成したい力は、他者と関りながら自分の頭で物事を捉えていくための基礎的な力（伝える力・協働する力・深める力）である。体験を通して、生徒は話を重ねながら、企画・運営をしていくことの難しさを学んでいっている。また、文化祭や課題研究発表会で発表を実施した。自分の考えや思いを相手に伝えることの大切さを様々な場面を感じたと思う。

国際交流となると、どうしても語学という壁は大きいですが、ともに同じ時間を過ごし、一緒に体験することで、お互いを知る貴重な経験になった。

⑤ 今後の対応と課題

「神山つなぐ公社」との連携が重要で、授業の打ち合わせを重ねながら授業展開の内容を深めていきたい。実際に体験を通じて、生徒は社会に出て必要な知識や技術を身につけていく必要がある。

(2) 神農祭チームプロジェクト

① 目的

例年の神農祭では、「当日の係の仕事が多く、生徒たちが楽しんでいる様子があんまり見えない。」「やらされている感が強い。」等意見が挙がった。そこで、生徒らが主となり、何か楽しめる企画を立て、「より神農祭を盛り上げたい」との思いで取り組むことにした。

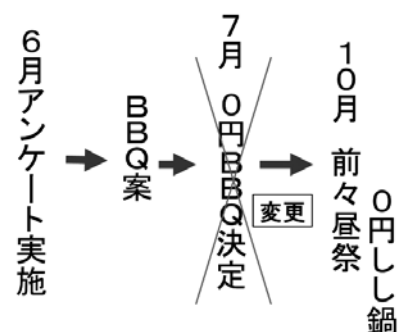
② 参加生徒

造園土木科2年4名、生活科2年生2名

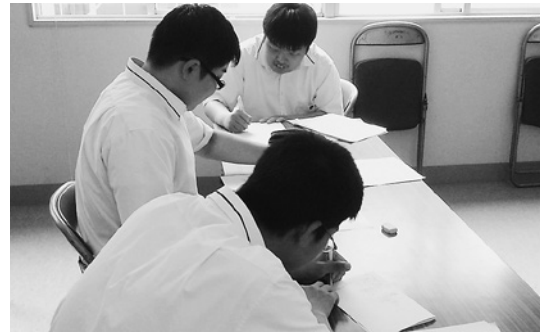
③ 学習内容

本プロジェクトでは、前昼祭をするのか、神農祭の当日に企画をするのか二択を話し合った。しかし、自分たちで作成したアンケート結果から、BBQ案が多く挙がった。本企画をすれば、神山町民とも、交流ができ、低コストで可能と考えた。活動の具体案の作成に検討を重ねた。

当初のBBQ案では、肉が焼ききれずに半生になってしまう可能性が高く、安心して食べることができ



前々日祭を開催までの流れ



話し合い、検討の様子

ないとの判断から完全に火が通る鍋に変更し、教職員と生徒に向けての説明をし、了承を得ることができた。

a 11月上旬から11月14日の事前準備まで

「とにかく、学校と地域の人と楽しめるようなイベントにしたい。」という想いで、各々で神山町の事業所や住民の方との交渉に向かった。結果、予想を上回る200人分の食材を調達できた。



食材の調達、交渉、しし鍋の試作の様子

b 当日（11月15日）の取組

午前9時から正午まで鍋の調理を手分けしながら行った。他学年の生徒の助けをもらいながら想定時間内で完成した。



午後からは、グラウンドに移動し、オープニングセレモニーの後、昼食会を行った。地域の食材を提供いただいた方々の紹介し、全員でおいしく食事をいただいた。



④ 感想・メッセージ

- ・最初は、自分たちで出した案が先生にたくさん断られて絶対にうまくいかないと思っていた。変更点を何度も改善し、当日に鍋を企画できた。当日は、神山町の人達の優しさやみんなで協力すれば、先生らにダメだしされたことを違うことに変えてできることを学んだ。
- ・先生には、新しいことに挑戦したので、意見を出しても学校でできないこと、判断に困ることもあったと思います。もっと生徒たちの意見を聞いてチャレンジさせてほしいです。
- ・地域の招待者の予定が合わず来られなかったことが残念です。次は、開催日も検討したいです。また、今年はじめて開催したこのプロジェクト。企画自体ができるのか大変だったけど、簡単にはあきらめないで、一味違うことができた達成感があります。
- ・この企画を乗り越えたのは、みんなの協力があったおかげです。特に、シシ肉は、0円で調達できたのはうれしかった。苦労したのは、肉が固くて前日に柔らかくなるまで煮込んでいたことです。おいしく提供できて嬉しかったです。

⑤ 全体成果及び評価

生徒ら発案のプロジェクトでやりがいがあるものだったと思う。特に、2学期の3ヶ月間では、地域に依頼や調理のリハーサル等の活動が本格的にできていた。彼らのコミュニケーション能力や地域社会や学校を盛り上げて、貢献しようとする思いが強く感じられた。計画通りに進めることができ、地域にある資源や連携につながった教育の展開が一層できた。

⑥ 今後の対応と課題

- ・学校内の予算において、本年度、特別活動課より料理実習や消耗品の負担が大きかった。
- ・保健衛生に関する事前講習が必要である。
- ・お礼の仕方を考える。
- ・地域の来場者0人であったので、次年度は日程調整が必要と考える。

(3) 加工品チームプロジェクト

① 目的

生産・加工・販売までの流れを知る。

② 対象生徒

造園土木科2年生4名、生活科2年生2名

③ 実施内容

- a 5月、どの食材を使い、何に加工するのか、さらに完成したその加工品をどうしたいのかに



話し合い



発表

ついて話し合った。その結果、学校で自分たちで育てた野菜でキムチを作ることになった。それらを地域の方々もたくさん来校してくださる 11 月開催の「神農祭」で販売することで、自分たちで作った加工品をより多くの人に届けたいと考えた。

b キムチの作り方を本やインターネットを活用して調べる。

c 6 月、キュウリキムチの試作を行う。試食してみると、思ったより辛くなり、改善しようと砂糖を入れるなど味付けの調整をしたが、納得のいくものにはならなかった。味付けの難しさを感じる。辛いものが好きな人だけに食べてもらうのではなく、できるだけ多くの人に食べもらえる味付けにしたいと考えるようになる。



キムチの試作



キュウリキムチ

d 7 月、いくつかの市販のキムチを食べ比べ、どのような味付けがよいか話し合う。その過程で、神農祭で販売するなら、キムチ単体で販売するよりは、その場ですぐに食べてもらえるようにしたい。そのためには、キムチと何かを合わせた商品にした方がより喜んで購入してもらえるのではないかという意見が出た。そこから、キムチを入れたチヂミを作ることに変更した。

e 夏休みに各自でチヂミのレシピを考えてくる。

f 9 月、3 種類のチヂミを 2 人 1 組で 1 つずつ試作して、食べ比べる。交流で来校されていた大学生にも食べていただきアドバイスをいただいた。同じ材料でも分量の微妙な差や焼くときの生地の高さなどによって仕上がりが全く異なることなどが試行錯誤しながら分かってきた。



1 回目チヂミの試作



チヂミの食べ比べ

g 3 種類のチヂミ（「大豆キムチチヂミ」、「キムチチーズチヂミ」、「ジャガイモとサツマイモのチヂミ」）それぞれの原価率、産食率を計算し、販売価格を考える。販売当日の人員の確保や段取り、材料費などを考え、「神農祭」当日は、3 種類の中から 1 種類を販売することにする。どの 1 種類にするかは、10 月のオープンスクールで 2 回目の試作を行い、来校者に試食とアンケートを依頼し、後日、それらを参考に決定する。

h 10月、オープンスクールで2回目のチヂミの試作を行う。



2回目チヂミの試作



オープンスクール

i 10月、オープンスクールで実施したアンケートには、たくさんのあたたかいお言葉やアドバイスをあり、その後の活動の励みとなった。アンケートでは「ジャガイモとサツマイモのチヂミ」を気に入ってくださる声が多かった。アンケートのアドバイス、産食率や材料費などを含め話し合った結果、「ジャガイモとサツマイモのチヂミ」を「神農祭」で販売することになった。どのようなサイズ、容器で、いくらで販売すれば買ってくれる方々に喜んでいただけるのかなどを話し合った。

j ポスターや看板の作成、活動の様子を模造紙にまとめた。

k 神農祭前日、当日と同じ流れで試作し、最終的な味付けを決定した。

l 神農祭当日は、目標の100個を少し上回る110個販売することができた。



販売前



調理中

m 後日、メンバーで振り返りを行う。

④ 全体成果及び評価

ゼロから何かを作り出すことの難しさや楽しさを感じる中で、普段当たり前のように身の回りにある物にも、そこに至るまで様々な過程があるということなど、生徒たちは多くの気づきを得ていた。さらに、食品の販売は、衛生面において正しい知識を持って配慮する必要があるという新しい視点も得ることができた。その中で、やりたいことと、できることの中で何を選択するかなど多くの学びがあった。今後の様々な場面で生かされる学びの多い貴重な経験であった。

(生徒の感想)

- ・目標の100食を完売できてうれしい。
- ・当日、お客様を目の前にすると、質問にうまく答えられなかった。
- ・自分から声をかけるのが恥ずかしかった。
- ・来年もこのような取組がしたい。
- ・最初、キムチからスタートとして最終「ジャガイモとサツマイモのチヂミ」となったが、もう少し時間があつたら、今回チヂミに使用した神山産の小麦粉でふわふわのパンケーキも作ってみたかった。

⑤ 今後の対応と課題

加工や販売に向けて施設の環境整備を行ったり、6次産業化に向けた教育環境の拡張を図っていくことの必要性を感じる。また、このプロジェクト参加生徒の一部が後日、三崎高等学校生との交流活動に参加した。その交流を通して、地域の大人にもっと協力してもらってもよいという視点を得ることができていた。その視点を実現可能にしていく方法についても検討していきたい。

(4) 景観創造チームプロジェクト

① テーマ

人と自然が共生するために、私たちができることはなんだろう。

② 対象生徒

造園土木科2年生 6名、生活科2年生 1名

③ 活動内容

令和元年4月23日(火)：チームビルディング、話し合い

令和元年5月7日(火)：地域の方へ聞き取り調査

令和元年5月14日(火)：石積み学校・金子玲大さんによる景観レクチャー

令和元年5月28日(火)：フィールドワーク／集落景観と石積み

令和元年6月4日(火)：フィールドワーク／耕作放棄地と手入れされた畑

令和元年6月11日(火)：文献調査／耕作放棄地の定義、原因、及ぼす影響

令和元年6月18日(火)：中間報告の準備

令和元年7月2日(火)：中間報告の準備

令和元年7月4日(木)：中間報告会

令和元年9月17日(火)：2学期の活動計画立て

令和元年9月24日(火)：大正大学との特別授業

令和元年10月4日(金)～11月8日(金)：草刈り3回、積み木のヤスリがけ(雨天時)

令和元年11月22日(金)：チーム別振り返り

令和元年11月29日(金)：2学期振り返り

令和2年1月10日(金)：発表会準備

令和2年1月17日(金)：発表会準備

令和2年1月20日(月)：発表リハーサル



フィールドワークで石積みの特性を観察



計4回にわたり草刈りを実施



長年耕作されていない畑を見学



草刈り後の畑の姿

③ 生徒の感想（2学期の作文より一部抜粋）

- ・「チームプロジェクトを通して学んだことの1つ目は石垣のことです。理由は前にも石垣のことはやったけれどチームプロジェクトでさらに詳しく教えてもらったからです。2つ目は耕作放棄地のことです。今までそういったものがあると知らなかったし、いざ見てみて自分たちでやってみたら草を刈るのがかなり大変だったことが印象に残っています。理由は範囲がとても広いのと草が長いので、二回に分けて切らないときれいに刈れないからです。しかも中には固い草や棒もあって切るのがとても大変で終わったあとはとても疲れました。」
- ・「5月に実際に石積みを見に行きました。石積みについて説明をしてくれて、雨が原因で石積みが崩れることやすき間がない石積みは水を出すようにすることや、上に人が歩いてもしけるように上に平らな石を置くなど、石積みについて何も知らなかったけど、このようなことが分かりました。6月は耕作放棄地について、影響や原因などを調べて、高齢者が多くて手入れができないことが分かりました。9月から耕作放棄地の草を刈り始めました。私ははじめて草刈機を使いました。とても重くて暑くて大変でした。チームの人におつかれさまでと言ってくれたりでうれしかったです。11月は文化祭で展示する写真を決めたり、文章を考えました。（中略）12月は良かったこと、新しく知ったこと、できるようになったこと、もう少しがんばりたかったことを話し合いました。その時に、自分から話すのが苦手なので、聞かれたときは答えるようにする、とチームの人たちに言えてよかったと思いました。」
- ・「2学期を通して、チーム全体のコミュニケーションがあまりとれていないと感じました。特に、話し合いの場や授業の最後に行く発表の時間など個人の意見を伝えるのが怖い人や面倒な人、ほかに人前に出るのが苦手な人が多い班なので、せめて話し合いがスムーズに出来るように1～2時間程度コミュニケーションをとれるよう、班の中でゲームなどをすれば少しでも慣れるのではないのでしょうか。ゲームといっても自作のものや、トランプなどをしながら、会話をはさんでいくのもありかもしれません。」
- ・「いろいろやってきましたが一番印象に残っていることがチーム内で話し合い調べたことをまとめるという作業です。僕のいた景観創造プロジェクトは、話すことを苦手と感じている人が多かったので、チーム内で話し合うのが少し大変でした。でも、質問をすれば答えてはくれるし、意見を求めれば答えてくれるのに少し間がありましたが答えてくれます。このことから、話し合いをするのに自分から質問をしたり意見をまとめたりする積極的まとめ役のような人がいたほうが、話すことが苦手な人でも話しやすくなると思うし、何よりこういった能力は社会に出ればどこでも必要になると思うので、僕も話すのが苦手なのでこういったことができるようにならなければならないというのがよくわかりました。」
- ・「耕作放棄地を刈り終わると、神農祭で何か出そうと考えていました。チームで耕作放棄地を刈ったりしたことを映像と文字で見せることになりました。動画を神農祭で見せようと考えていたので休日にドローンを撮りに行くことにしました。ドローンの撮影は時間が決まっていたので長いことはできませんでしたがいいものは撮れたなと思いました。僕は動画担当なので作ることになりました。2日くらいで途中まででき、なんとか完成までいきました。ほかのメンバーはほかの仕事をしてもらっていたのでスムーズに終わりました。神農祭では僕たちの映像をたくさんの人に見てもらうことができました。このプロジェクトで、刈るところからやり映像もつくりチームみんなでやれば成功することができたと思いました。」
- ・「耕作放棄地について少し学ぶことができた。神山はどんどん人口が減っていて、雑草などを手入れする人が少なくなっていることを知った。そこで、景観創造プロジェクトのメンバー達と実際に耕作放棄地に行って雑草などを刈った。つまらなかった。これからは、もっとマシな活動をしたと思った。」
- ・「神山は、木、草、川だけしかない。耕作放棄地の草を刈った。それに対して抱いた感情は、しょ

うもない。俺は草木を燃やしたかった。が！しかし1年が燃やしたからうざいと感じました。」

④ 全体成果及び評価

草刈り自体は大変な作業であり、意欲を無くす様子もしばしば見られたが、膨大な荒地の草を刈り切ったことへの達成感があった様子。また、課題研究発表会の参加者コメントで草刈りへの慰労の言葉が多く寄せられたことや、「もっと意味のあることがしたい」などといったネガティブな言葉も受けとめてもらえたこと、1年生から「先輩たちが綺麗にしてくれた畑を大事に使いたい」といった感想があったことは、自分たちの活動や感想に対してポジティブな反応をもらえる機会として有効に作用したように思われる。

話し合いの苦手なメンバーが集まったことで本人たちのストレスはあったが、そういう中でどうすれば良いかを考え、行動する学習機会になった。作文にもその点の記述が多いことが印象的であった。

⑤ 今後の対応と課題

チーム分けの段階でテーマに特に関心のない生徒が集まり、活動を進めていく難しさがあった。3学期に1年生の生徒たちから出てきた声をもとに4つのテーマを設定しているものの、より生徒たちの関心に近づけたテーマを考えたい。

草刈りの際に顔面ガードをつけていない時があり、運営指導委員から注意を受けた。安全管理に十分注意する。

(5) 他校との交流活動

① 目的

三崎高等学校の「総合的な学習の時間」で行われているマイプロジェクトのテーマ設定や取組方法を参考とし、今後の「課題研究」のテーマ設定や進め方、さらには、学校生活・地域活動全体に生かしていくことを目的とする。

② 対象生徒

造園土木科2年生5名、生活科2年生2名

③ 訪問先

学 校 名：愛媛県立三崎高等学校

住 所：〒796-0801 愛媛県西宇和郡伊方町三崎311番地

電話番号：0894-54-0550

④ 訪問期間

令和2年2月17日(月)から令和2年2月18日(火)まで

⑤ 実施内容

a 事前学習（交流の目的の周知、発表準備）

b 交流1日目

8:30 神山校出発（ジャンボタクシーにて）

12:30 愛媛県立三崎高等学校着

到着後、校長室にて挨拶、自己紹介

学校紹介のリハーサル・打ち合わせ

13:00 オリエンテーション

各校10分ずつ学校の取組を紹介、質疑応答

14:40 「総合的な学習の時間」の1・2年生合同授業の見学

15:30 エシカル甲子園（三崎高校）事例発表、質疑応答

16:00 みっちゃん大福（三崎高校）事例発表、質疑応答

17:00 三崎高校出発 宿泊施設へ

17:30 振り返り（1時間半）



発表準備・打ち合わせ



本校の取組の発表



質疑応答



授業見学 1



授業見学 2



授業見学 3

c 交流2日目

- 9:00 三崎の地域に伝わる裂織り体験
- 11:30 三崎高等学校OBの方のお店で昼食
三崎高校生と交流, OBの方の講話
- 12:30 神山校へ出発
- 16:30 徳島駅着



「裂織り」の説明



「裂織り」体験



OB の方の講話



三崎高校生との交流

d 事後学習（2年生全体への報告準備，報告会）



事後報告 1



事後報告 2



事後報告 3

⑥ 全体成果及び評価

三崎高等学校は、学校の規模や立地条件など神山校と共通する部分が多くあるため、学校の取り組み内容がとてもイメージしやすかった。生徒たちは本来の目的である、「課題研究」のテーマ設定や進め方に参考になることを少しでも多く持ち帰ろうと、積極的に質問をし、メモを取る姿が見られた。1日目の交流のあと、皆で感じたことなどを言語化し共有したことで、2日目はより具体的な質問などができていた。普段、おとなしい生徒も自分なりに精一杯、言葉で表現しようと、考えて行動する姿が印象的であった。

(生徒の感想)

- ・三崎高校の生徒と先生が同じ熱量を持って一緒に地域を盛り上げようとしているところがとても刺激的で、自分たちもそうありたいと思った。
- ・自分たちも加工品を作り、皆を笑顔にしたい、利益を出したいという思いで「神農祭」で販売したが、三崎高校生は地域を活性化させたいという思いで商品開発をして販売しているところが違うと思った。
- ・発表をする時、三崎高校生は原稿をただ読むのではなく、自分の言葉で話しているので内容や思いがよく伝わってきた。

⑦ 今後の対応と課題

生徒たちは他校の取組みに刺激を受け、目に見えて言動に変化がみられる貴重な経験ができていた。今後、このような交流を三崎高等学校や他校と目的や時期、費用などを含めどのように進めていくのか検討していく必要がある。

IV その他の取組

1 森林女子部

(1) はじめに

4年前、徳島県の林業の現状と、神山町の林業従事者不足の実態を聞き、少しでも協力しようとして先輩方が結成した組織が「森林女子」である。また、2年後には森林資源を生かした商品開発に取組、宣伝活動を積極的に展開する「森林女子部」を結成した。更に今年度は新入生も5名加わり取組を進化させ、自分たちが過疎化の進む神山町の地方創生の戦力となる為、地域の森林資源を十分発揮させ、活力のある元気な町づくりを推進していく目的で、本年度取り組んだ。

これまでの取組として、平成27年度初代森林女子は、林業体験で山林での作業体験を元に宣伝用のプロモーションビデオを、町内にあるIT関連の映像会社「株式会社えんがわ」の協力で幅広く県内の林業関係イベントに参加した。平成28年度二代目森林女子は、先輩達のこれまでの取組や活動内容を発信しようと、研究発表会やセミナーでのプレゼンテーション報告に積極的に参加し、林業関係団体より複数の賞を受賞した。平成29年度3代目森林女子は、林業の仕事や森林の魅力の発信に加え、神山町の観光名所や神山らしさをコンセプトにした商品開発に本格的に取組、森林女子部を結成し、とくしま市内のイベントやsunsunマーケットでの販売活動を実施した。平成30年度には持続可能な森林環境問題を考える団体が、徳島県に集った第6回木育サミットで、分科会のパネリストとしてこれまでの取組などを発表した。また、東京国際オリンピックセンターで開催された、全国高校生環境学習サミットに徳島県代表として参加し、神山町と連携した森林環境保全や林業後継者不足に係わる取組を全国の高校生に発信した。これらの取組が評価され、地域連携に関わるキャリア教育推進で文部科学大臣から奨励賞を受賞した。



H30 年度全国高校生環境学習成果発表会



文部科学大臣奨励賞を受賞した森林女子部

(2) 実施内容

① 国立岩手大学附属中学校との交流活動

6月25日、神山町農村環境改善センターで、城西高等学校神山校「森林女子部」と、岩手大学附属中学生3年生が交流ワークショップを行った。テーマは「地域活性化に高校生がどう関わって活動しているか」について、10人程の小グループに分かれ質問スタイルで1時間ほどグループ



岩手大学附属中学生と森林女子部の交流活動



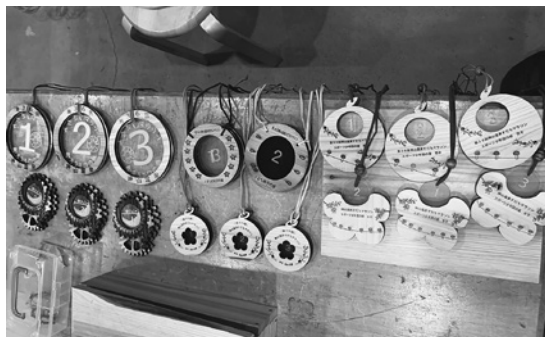
中学生に取組を説明している様子

ワークを行った。参加者には地域の大人も加わり、神山町がこれまで取り組んできた企画や特徴的なイベントについて語り合っていた。

生徒の感想からは、自分たちがいかに考えて、企画し神山町を盛り上げていく取組を行ってきたことについて他県の中学生や先生方にPRできたことは、良い出会いにつながりPR活動にも繋がった。などの意見が部員からあった。

② 地域の特産材を使った商品開発

7月から8月にかけて、神山町教育委員会社会体育担当の方から、第36回神山温泉すだちマラソン大会の入賞メダルを1年の部員5名が各部門ごとの1位・2位・3位のメダルを作成してほしいと依頼があった。マラソン大会は毎年11月に行われ参加者は森林女子部の作品が楽しみで、関係者も期待をしている。作品のコンセプトは、神山産のスギ材を使い神山町に関係するデザインでメダルを完成させるというミッションである。ペアーの部のメダルを担当した部員は、2人が歯車のようにかみ合って仲良くゴールするイメージで歯車をデザインとしたメダルを完成させた。企画した委員会からは、「毎年ユニークなメダルを考えていただき感謝している。また来年も頼みます」と期待に答えた結果となった。



部門ごとの入賞メダルが完成



メダルを完成させた1年生部員

③ Monteki マルシェ

10月22日、名西郡神山町の広野小学校旧校舎で森林女子部の部員5人が木育ワークショップでマルシェを盛り上げた。目的として、空き校舎となっている広野小学校旧校舎は、子どもの教育施設という役割に加え、こどもを中心とした住民・保護者・行政の地域協働の象徴として地域コミュニティの中心に立ち続けてきた。近年少子化による児童生徒数の減少、市町村合併などの影響により学校の統廃合が加速し、空き校舎となった施設はその後の有効活用が求められているが、活用が図られず遊休施設となってしまっているものも多く存在し、地域コミュニティを再び活性化する趣旨で企画された。森林女子部も地域の活性化及び空き校舎の活用策を模索する目的と地域交流をコンセプトにして参加しようとして取り組んだ。ターゲットをファミリー層にしほり「木育ひろば」を企画することとした。成果として、神山町外のいろんな他世代の人たちの交流ができた。木育ひろばの体験活動を通して子どもたちの発想や創造力に気づき私たちが夢を与えることができた。空き校舎に適した持続可能な事業モデルの取組に貢献し、SDGsの推進にも繋がった。



グルーガンを使った森の妖精づくり



神山材の積み木で子どもたちと遊ぶ様子

④ とくしま木づかいフェア 2019

10月19日、あすたむランド徳島ジャンボパラソルで開催された、とくしま木づかいフェア 2019があり森林女子部員2名と顧問2名参加がイベントに参加した。主催者である、とくしま木づかい県民会議会長の飯泉嘉門徳島県知事より、1年間の森林女子部の取組を評価していただき、木づかいアワードのアクション部門のグランプリを受賞した。この受賞は2年連続で、昨年度も先輩たちが受賞した価値のある賞である。その他、木に触れる体験コーナーやパズルやゲームコーナーを実施した。木にまつわるフリーマーケットでは、森林女子部がレーザーカッターで賞品づくりをしたキーホルダーや各種アクセサリなどを販売した。生徒からは「飯泉知事から直接、グランプリ表彰をもらえるとは思わなかった。これまでの取組が評価され良かった。」という感想が聞けた。



販売活動をする森林女子部



飯泉知事からグランプリを受賞

⑤ フォレスト・サイエンス Festa

11月10日に、徳島県木材利用創造センターでフォレスト・サイエンス Festaが開催された。このイベントは徳島県林業アカデミーが主催するもので、神山校卒業生も参加した。当日、森林女子部員3名、顧問2名が参加した。体験コーナーでは、松ぼっくりやどんぐりなどを使った「森の妖精づくり」というクラフト体験を子どもずれの家族に体験してもらった。また、森林女子部の取組などを徳島県の林業関係者にプレゼンテーションで報告を行いました。テーマは「～学校林を活用した保全プロジェクト～」で学校林からでた廃材を利用して木材の有効的な利用を考える活動や、地域の大人と森の恵みに触れる企画などに取り組んが報告を行った。参加者からは、「高校生がここまで考えて森林の取組を行っていることに驚いた。私たち林業関係者も必死で頑張らなければいけないと勇気づけられた。」などの感想をいただいた。生徒からも「バイオマスセミナーを聞き、木材燃料の無限性を感じることができた。」「ロープワークや林業機械のメンテナンスをアカデミーの方に教えていただき勉強と良い経験になった。」などの意見があった。



学校林を活用した保全プロジェクトの報告



販売活動を行う森林女子部

⑥ 4K・VR 徳島映画祭

11月24日に名西郡神山町広野小学校旧校舎で4K・VR 徳島映画祭があり 森林女子部員7名と顧問3名が参加した。活動内容として学校林で切り出した間伐材の切れ端を、レーザーカッターで加工する。その加工したキーホルダーやストラップ、写真立てなどの商品を販売し、神山産材

の宣伝活動を行った。また、木育をテーマに木の積み木で子どもたちが楽しくワークショップを行った。今回も素晴らしい宣伝活動ができた。



販売活動を行う森林女子部



こどものコーナー「森の妖精づくり」

⑦ KAMIYAMA BEER クリスマスマーケット！

12月15日に神山町神領字西上角の「KamiyamaBeer」で、森林女子部員7名と顧問3名が、KAMIYAMA BEER クリスマスマーケットに参加した。

特産材スギを使った商品で神山町の林業を宣伝することができた。この参加したマーケットの皆さんとも有意義な時間が過ごせ、沢山の大人の方とコミュニケーションが取れることができた。この様な神山マーケットで、私たち森林女子部の取組が紹介できたことは、地域の活性化につながったと確信している。



神山町で開始された「KAMIYAMA BEER クリスマスマーケット」に参加した森林女子部

⑧ 課題研究発表会

1月22日に、神山町農村環境改善センター3階多目的ホールにて、神山校の課題研究発表会に森林女子部員5名が参加し、活動内容について発表した。課題研究発表会は、造園土木科と生活科の3年生が今年度、それぞれの課題を設定し行ってきたプロジェクトを発表する行事である。今回は森林女子部が取り組んでいる「神山の森林ビジョン」の連携について、プレゼンテーション報告を行った。私たち森林女子部の考えと、これまでの活動報告を部員全員が発表を体験した。参加された地域の方や保護者やこれまで連携に協力して抱いた方々から、「素晴らしい取組をしていますね、これからも神山校のため、地域のために頑張ってください」と好評をいただいた。



1年生がプレゼンで報告している様子



発表の中で、持続可能な取組を紹介した

⑨ 第7回木育サミット in 新木場

2月8日に木材会館（東京木材間屋協同組合）新木場で、東京おもちゃ美術館が主催で、第7回木育サミット in 新木場が盛大に実施された。開催行事の後、基調講演として、林野庁長官の本郷浩二氏が、都市と森をつなぐ木材利用と木育をテーマに、冒頭、日本の林業成長の現状の話をした。特に、国産材の供給量が10年前に比べると139%アップの3,020万㎡と林業成長の効果が現れていると説明した。次に基調シンポジウムとして、テーマを「東京の樹が生かされてる」で、東京都檜原村が、「木育」をコンセプトに林業板エコツーリズムとして地域活性化の推進に一役を行った、実績報告がなされた。特に木は捨てる場所がない、この発想が面白く、枝や落ち葉を商品として販売していた。午後からは各分科会に別れ、①分科会「小学校中学校における木育活動の意義」、②分科会「SDGsに企業の「木育」はどう貢献できるか」、③分科会「人巻き込み力で地域に木育を広げる」、④「お隣さんの問題をズバッと解決！教えて木育のこと」について発表が行われた。



木育サミットに参加した一年生部員



開会式の様子

(3) ふりかえり

今年度の活動を終えて、森林女子部は部活動として、放課後や休日・祭日を活用し地域や企業団体が主催しているイベントに積極的に参加してきた。イベント会場では、いろんな参加者と会話や活動を行い、コミュニケーション・スキルや活動の取組を評価していただいたことが部員の刺激となり自信に繋がってきている。活動毎に「今の気持ち」「良かったこと・上手くいかなかったこと」「もっとしたいこと」の観点で部員全員がふりかえる機会や場面を設定してきた。ふりかえりの中で、「部員の意見に刺激を受けた」や「これからより森林女子部の活動を頑張ろうと思った」などの発言がでてきた。

(4) 今後の展望

様々なイベントや発表会や全国的なセミナーを通して部員たちは他校の生の発表を見たり、交流したりすることで活動をさらに進めていくヒントと共に切磋琢磨する仲間を得た。また、商品開発や販売活動で林業の「6次産業化」に挑戦していく目標も設定することができた。今回、生徒たちが得た学びを地域との協働による高等学校教育改革推進事業に生かせるよう見守っていく。

2 神山まちぐるみ高校生インターンシップ

(1) 目的

神山町内での就職を考える機会であるとともに、自身の進路を考えるため、自主的に参加する体験の機会として提供する。目的は次の通り。

- ① 進路選択のための判断材料が得られる。
- ② 自らの仕事観を育む。

- ③ 神山町のいきいきと働く大人との新しいつながりが持てる。
- ④ 興味のある分野でのアルバイトができる可能が持てる。

(2) インターンシップの詳細

- ① 時 期 1回目：令和元年8月2日(金)から8月9日(金)まで
2回目：令和元年8月23日(金)から8月30日(金)まで
- ② 対 象 神山校の2年生7人
- ③ 受入先 町内の6つの事業者（神山創造学の仕事体験での受入事業者など）
里山みらい（すだち農家）、里山の会（有機野菜農家）、荒井工務店（大工）、広野
保育所、神山森林組合
- ④ 業 務 業務内容については、各事業者とコーディネートを担当する神山つなぐ公社とが協議し
て決める。
a 期間は、実質5日間
b 業務時間は、基本9時から16時まで（日報作成の時間は別）

(3) 事前事後の学習の詳細

- ① 事前学習
a 時期 令和元年7月31日(水) 8時30分から12時まで
b 対象 2年生7人
c 内容 参加動機、目標、仕事へのイメージなどを言語化し仲間に伝え、その後、レポート
に記入する。
- ② 事後学習
a 時期 1回目：令和元年8月9日(金) 13時から16時まで
2回目：令和元年8月30日(金) 13時から16時まで
b 対象 1回目3人、2回目4人
c 内容 やりがいを感じたこと、目標の達成度とその理由、希望職種の仕事を終えての気持
ちの変化、残りの高校生活での目標を言語化し仲間に伝え、その後、レポートに記
入する。



すだちの収穫



木材市への準備

(4) インターンシップ後の生徒の動き

- ① 農業就労希望の2人の生徒と共に農家を2件訪問し、農業についての話を聞いた。
※農家の白桃さん、神山椎茸生産販売協同組合
- ② 保育士希望の2人は、自ら広野保育所の所長と交渉し、12月24日から27日の4日間を追加のイ
ンターンシップとして就労した。
- ③ 大工希望の1人は、9月30日に追加のインターンシップとして、自身で加工した屋根材の設置

工事のため就労した。

(5) 全体の成果

事前事後学習では、苦手としている考えを言語化することを徹底して実施した。インターンシップ中の言語化に関しては、それぞれの日報のレベルを見て、インターンシップ期間の途中で個々に書き方のアドバイスをした。その結果、言語化できる量が増え、より具体的に記入することができた生徒が増加した。

事後学習では、体験を言葉にする時間をたっぷりと取り、言葉になるまで待つことで、普段以上に体験を言語化することができた。

昨年の課題であったインターンシップの経験を次にどう繋げることができるのかという点は、9月の事後の個人面談を経て、数名、次の動きに繋げることができた。

(6) 事業所からの声

生徒が希望するなら、引き続き接点を持っていいという声が多数あった。その結果として、インターンシップ終了後も就労する機会をつくることができた。

(7) 今後の課題

- ① 次年度、申し込み数が急増した場合、今年度の体制では運営が厳しいため、先生のサポートが必要となる可能性がある。
- ② 思いや体験の言語化を十分にサポートできない生徒もいたため、その点のスキルの強化が必要である。

3 孫の手プロジェクト

(1) 目 的

一人暮らしになり、家の周りの草地や庭木の手入れが難しくなってきた高齢者のお宅に、城西高校神山校の高校生が訪れ、学校で教わった農業の知識や造園の技術を活かして、その困り事を有償で解消するプロジェクト。

これは「便利な地域サービス」ではなく、草刈り等を介した「交流プロジェクト」であり「実践教育の機会」である。この取り組みにより「高校の新しいあり方や地域との関係性」の模索を目的としている。

(2) 対象生徒

城西高校神山校全生徒（男女や学年、科を問わない）

(3) 連絡先

団 体 名：一般社団法人神山つなぐ公社 代表理事 杼谷 学
住 所：〒771-3311 徳島県名西郡神山町神領字本野間100
電話番号：050-2024-4700

(4) 実施内容

日 時：令和元年8月5日・20日、12月24日・25日 計4日間
場 所：町内15箇所
参加人数：延べ51人

プロジェクトの進行は次の手順で行っている。

- ① 地域のお年寄りへチラシを配布し、依頼は公社が受け付ける。
- ② 電話等で依頼があると公社スタッフが直接訪問し、作業内容や日程を調整し取りまとめる。
- ③ 学校に連絡し、参加したい生徒に集まってもらう。
- ④ 生徒自身がやりたい仕事やできる仕事を考えながら、生徒同士で相談し、学年を超えた縦のつながりがあるチームを決定。
- ⑤ チームごとに下見に出かけ、必要な道具や作業内容をイメージする。
- ⑥ 当日は、依頼者にあいさつを済ませ、作業内容の確認を行った上で、それぞれが分担、協力して作業を開始。
- ⑦ 途中休憩では、お茶菓子を頂くことがあり、お年寄りと世間話をしたり作業の進捗状況なども確認する。
- ⑧ 最後に作業完了の確認を行い、剪定クズなど清掃と片付けをする。
- ⑨ 依頼者から公社へ作業代をいただき、生徒には公社からアルバイト代金を支給、領収書も記入。
- ⑩ 使った道具を学校の車に乗せ、高校へ片付けて一日の作業が完了。



草刈り機を使った作業



休憩の時間にはお茶を飲みながら談笑



剪定クズを丁寧に片付ける



依頼者に確認してもらい、最後に記念撮影

(5) 全体成果及び評価

2016年から始めて、今年で4年目を迎えた孫の手プロジェクト。1年生のとき初めて剪定作業を経験したときは、何をどのようにハサミを入れたらいいのか分からず、おどおどしていた生徒が、3年生になって大胆かつ丁寧に作業スピードがあがっている。幾度となく失敗や成功を実体験で積み重ね、自信を獲得した姿が頼もしい。

休憩の合間におばあちゃんから「助かるわ！ありがとう」と声をかけられ、その一言が生徒に力を与える。仕事はお金のためだけでなく、人に感謝されるものだと考え直した生徒もいる。

二度三度依頼をしてくれる人もいる。「高校生の学習機会になるならぜひ！」と快く依頼を続けてくれる。毎年違う生徒が何うなかで、生垣の高さがだんだん揃ってきて、技術だけでなく信頼についても先輩から後輩へのリレーがうまく繋がっている。

毎年のように徳島新聞で活動の様子を取り上げてくれる。地域の方からの評判も良く、地域から

の信頼を得てお祭りに呼ばれる場面も見受けられるようになってきた。

(6) 依頼者からの意見

毎年依頼してくれるおばあちゃんは、いつも、パンやジュースを用意してくれて、おしゃべりが楽しいからまた来年もお願いすると言ってくれている。ただ、今年大切にしていた「イワマツ（イワヒバ）」をむしり取ってしまい、残念な思いをさせてしまった。参加する生徒も植物のことを知り、必要なもの必要で無いものの判断ができるようにしなければいけないと反省したところ。

庭木の手入れや草刈りだけでなく、室内の掃除を手伝ってほしいという障害を持った高齢者の依頼もある。重い荷物を動かして床を掃除したり、手が届きにくいカーテンレールを掃除したり。「また同じ子に来てほしい」という声をいただいている、働きぶりが評価されたんだなと感じている。

4年間進めていると、亡くなった方もいる。96歳で一人暮らしをしていたおじいちゃん。高校生が来る日を楽しみにしすぎて、前日に入院することもあった。高知に嫁いだ娘さんが帰って来て、豪勢なお昼を用意してくれた。おじいちゃんは嬉しくなって、詩吟を歌ってくれたが、高校生は戸惑っていた。

(7) 今後の対応と課題

現在は公社が中間に立ち、地域のお年寄りと神山校の生徒をつなげている。生徒の安全管理のため必ず公社スタッフが立ち会うようにしているが、それがゆえに日時や地域が限定される事に繋がっている。

また、依頼を受けて内容を聞くというプロセスを公社が担っているのも、生徒にとっては機会損失とも捉えることができる。学校外の活動としての良さもあるので、生徒の自主的な活動として発展できないか模索中である。

あと、依頼者とのコミュニケーションが十分とは言えないため、事前学習や振り返りなどの時間をつくり、気づきを次に活かせる機会にする必要がある。

V 成果・課題

1 今年度の成果目標と評価

(1) 本構想において実現する成果目標の設定

- ① 本事業に関連する活動での学びを生かして自らの進路を実現する生徒の割合24%（目標値50%）
- ② 自分たちの取組が地域貢献につながっていると感じる割合75%（目標値80%）
- ③ 高校時代を過ごした地域で働いたり暮らしたい、あるいはその地域に将来的に関わりたいと考える生徒の割合56%（目標値80%）
- ③ 新入生の体験入学参加者割合48.3%（目標値90%）

(2) 地域人材を育成する高校としての活動指標

- ① 校庭マルシェ開催回数2回（目標値4回）、森林ビジョンと連携した演習林実習の実施回数7回（目標値5回）、孫の手プロジェクトにおける石積みの修復に関する依頼を受けた件数2件（目標値2件）、石積み実習の実施回数6回（目標値4回）、コース研修の実施回数1回（目標値2回）
- ② 研究活動の発表回数10回（目標値10回）
- ③ 本構想に関する教員研修の実施回数3回（目標値3回）、本構想に関する研究授業の実施回数2回（目標値3回）

(3) 地域人材を育成する地域としての活動指標

- ① スタディツアーの実施回数1回（目標値2回）、コンソーシアム活動回数3回（目標値4回）、耕作放棄地対策活動回数15回（目標値10回）、生産・保管している在来種・固有種の品種の数37種（目標値40種）
- ② ホームページでの取組紹介6回（目標値10回）

1年目で、十分な成果はあがっていないが、本事業の様々なプロジェクトを通して地域のことを知ることで、地域の課題解決のためどうすれば良いかを自らが考え、実践しようと意欲的に取り組むことができるようになってきた。

2 次年度以降の課題及び改善点

本事業に関連する活動での学びを生かしてより多くの生徒が自らの進路を実現できるように、校内での学びと地域での学びを相互に結びつけること、また3年生での課題研究をより有意義なものにすることが課題である。次年度は学科再編により「地域創生類」として入学した生徒が2年生になり、初めて2つのコースに分かれるが、今年度1年間カリキュラム開発等専門家会議やコンソーシアム会議で協議してきたことを踏まえつつ、生徒が地域の人と関わっていくことや地域での体験を通して、地域の担い手として具体的に果たすべき役割を自覚し、学んだことを次の進路に生かせる「学びの個別最適化」に向けた取組を行う。具体的には、今年度取得したJGAP認証の維持に向けた活動や耕作放棄地対策としての小麦の栽培・加工・販売などを通して地域と協働した6次産業化の取組をより活発化させることで、生産・加工・流通・消費など、地域や学校で学んだことと社会とのつながりに気付かせる。また、生徒に育成する資質・能力とその到達度を共有するため3年間を見通したルーブリックを作成し、コンソーシアム会議などにおいて共通理解を図る。事業終了年度には、3年生での課題研究を充実させる取組を中核に据えて事業を進めるとともに、事業終了後のコンソーシアムとの連携の在り方についても協議する。

VI 資 料

ふりがな	とくしまけんりつじょうせいこうとうがっこうかみやまこう	指定期間	2019～ 2021
学校名	徳島県立城西高等学校神山校		

2019年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(2021年度)
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 本事業に関連する活動での学びを生かして自らの進路を実現する生徒の割合					単位：％
	本事業対象生徒：		24%			50.0%
	本事業対象生徒以外：		17%	17%	—	—
	目標設定の考え方：本事業に関連する授業内外の活動を経験して、自らが希望した進路を実現できる生徒の割合					
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 自分たちの取り組みが地域貢献につながっていると感じる生徒の割合					単位：％
	本事業対象生徒：		75%			80.0%
	本事業対象生徒以外：		—	—	—	—
	目標設定の考え方：校内アンケートを実施					
b	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 高校時代を過ごした地域で働いたり暮らしたい、あるいはその地域に将来的に関わりたいたいと考える生徒の割合					単位：％
	本事業対象生徒：		56%			80.0%
	本事業対象生徒以外：		—	—	—	—
	目標設定の考え方：校内アンケートを実施					
c	(その他本構想における取組の達成目標) 新入生の体験入学参加者割合					単位：％
	本事業対象生徒：		48.3%			90.0%
	本事業対象生徒以外：		50.0%	50.0%	—	—
	目標設定の考え方：学校のビジョンや授業内容を理解して入学する生徒の割合					

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値(2021年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 校庭マルシェ開催回数					単位：回
	—	—	2回			4回
	目標設定の考え方:2年生神山創造学のチームプロジェクトの一環で生徒たちが企画し、実施する回数					
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 森林ビジョンと連携した演習林実習の実施回数					単位：回
	—	—	7回			5回
	目標設定の考え方:実習自体は例年実施している。環境デザインコースの実習として実施する回数					
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 孫の手プロジェクトにおける石積みの修復に関する依頼を受けた件数					単位：件
	—	—	2件			2件
	目標設定の考え方:孫の手プロジェクト自体は例年10～17回ほど依頼がある。そのうち石積みに関する依頼件数					
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 石積み実習の実施回数					単位：回
	—	1回	6回			4回
	目標設定の考え方:孫の手プロジェクトとして有償で依頼を受けるまでのトレーニングとして実習を行う回数					
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) コース研修の実施回数					単位：回
	0	0	1回			2回
	目標設定の考え方:コース別で生徒が実地研修を行う回数。					
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 研究活動の発表回数					単位：回
	5回	10回	10回			10回
	目標設定の考え方:校外で生徒または教職員が研究活動内容を発表する回数					
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 本構想に関する教員研修の実施回数					単位：回
	—	5回	3回			3回
	目標設定の考え方:各学期ごとに本構想の振り返りを教員間で実施する回数					
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 本構想に関する研究授業の実施回数					単位：回
	—	—	2回			3回
	目標設定の考え方:教職員やコンソーシアム構成組織、運営指導委員会のメンバーらが見学することのできる研究授業の回数					

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（年度）
（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標）						単位： 回
a	スタディツアーの実施回数					
	1回	—	1回			2回
目標設定の考え方：生徒、教員、コンソーシアム構成員等、多様な組み合わせで訪問する回数						
（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標）						単位： 回
a	コンソーシアム 活動回数					
	—	—	3回			4回
目標設定の考え方：コンソーシアム構成組織へ呼びかけ、学校見学や進捗状況の報告・議論等を行う回数						
（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標）						単位： 回
a	耕作放棄地対策 活動回数					
	—	—	15回			10回
目標設定の考え方：耕作放棄地を活用して作物を生産できる環境を活動を行う回数						
（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標）						単位： 種
a	生産・保管している在来種・固有種の品種の数					
	30種	35種	37種			40種
目標設定の考え方：高校と協力して在来種・固有種の種および苗を生産・保管している種類の数						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数（人）	88	89	81		
本事業対象生徒数	—	—	81		
本事業対象外生徒数	—	—	0		

高校魅力化評価システム 診断結果

(抜粋)

1. 生徒の学習活動の機会

	全 体 (%)	他地域との差 (pt)	備 考
主体性に係る機会	52.9%	6.6	学校外のいろいろな人に話を聞きに行く 60.8%
協働性に係る機会	74.5%	4.49	グループで協力しながら学習や調べものを行う 78.4% 活動, 学習内容について生徒同士で話し合う 76.5%
探究性に係る機会	61.3%	0.34	
社会性に係る機会	46.4%	2.78	地域の魅力や資源について考える 60.8%

2. 地域の学習環境

	全 体 (%)	他地域との差 (pt)	備 考
挑戦の連鎖を生む 「安心・安全の土壌」	67.1%	- 5.13	
協働を生む 「多様性の土壌」	67.8%	- 5.59	自分と異なる立場や役割を持つ人との関わりがある 76.3% 立場や役割を超えて協働する機会がある 65.0%
問う・問われる 「対話の土壌」	75.9%	- 0.67	将来のことや実現したいことを話し合える大人がいる 68.8% 周りの大人は、じっくりと話を聞き、考える手助けをしてくれる 83.8%
地域や社会に 「開かれた土壌」	65.6%	2.65	地域から大切にされている雰囲気を感じる 75.0% 地域の人や課題などにじかに触れる機会がある 63.8% 自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある 47.5%

3. 生徒の自己能力認識

	全 体 (%)	他地域との差 (pt)	備 考
主 体 性	57.7%	- 5.31	自分自身に満足している 38.8% うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む 75.0%
協 働 性	65.9%	- 8.18	相手の意見を丁寧に聞くことができる 76.3%
探 究 性	52.3%	- 6.93	地域を対象とした PBL に熱心に取り組んでいる 55.0%
社 会 性	53.0%	- 5.73	地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい 51.3% 将来、自分の住んでいる地域に役に立ちたい 57.5% 将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う 60.0%

4. 生徒の行動実績

	全 体 (%)	他地域との差 (pt)	備 考
主体性に係る行動	52.9%	- 8.93	
協働性に係る行動	52.9%	- 13.61	
探究性に係る行動	45.1%	- 11.46	
社会性に係る行動	34.6%	- 14.67	いま住んでいる地域の行事に参加した 17.6% 地域社会などでボランティア活動に参加した 25.5% 地域の大人と何気ない会話を交わした 60.8%

5. 満足度

	全 体 (%)	他地域との差 (pt)	備 考
今の生活全般に対する満足度	48.8%	- 13.11	
この学校に入って良かったと思う	82.5%	0.56	

平成31年度 高等学校教育課程表

						校名	徳島県立城西高等学校神山校								課程	④・定・通	学科	造園土木 地域創生	科 類			
	入 学 年		平成31年度入学				単位 数計	平成30年度入学				単位 数計	平成29年度入学				単位 数計					単位 数計
	類 型		地域創生類 環境デザインコース					造園土木科					造園土木科									
	学年（学級数）		1 (1)	2 (1)	3 (1)	4 ()		1 (1)	2 (1)	3 (1)	4 ()		1 (1)	2 (1)	3 (1)	4 ()		1 ()	2 ()	3 ()	4 ()	
教科	科 目	標準 単位																				
国 語	国語総合	4	2	3			5	2	3			5	2	3			5					
	国語表現A	3			2		2			2												
	現代文A	2																				
	現代文B	4																				
	古典A	2																				
地 理 歴 史	古典B	4																				
	世界史A	2		2			2		2			2		2			2					
	世界史B	4																				
	日本史A	2																				
	日本史B	4																				
公 民	地理A	2	2				2	2				2	2				2					
	地理B	4																				
	現代社会	2			2		2			2				2		2						
	倫理	2																				
	政治・経済	2																				
数 学	数学Ⅰ	3	3				3	2	2			4	2	2			4					
	数学Ⅱ	4																				
	数学Ⅲ	5																				
	数学A	2		2			2			2				2		2						
	数学B	2																				
理 科	数学活用	2							△2		△2			△2		△2						
	○数学探究	2			2		2															
	科学と人間生活	2	2				2	2				2	2				2					
	物理基礎	2			▲2		▲2															
	物理	4																				
保 健 体 育	化学基礎	2			△2		△2															
	化学	4																				
	生物基礎	2		2			2		2	2		4		2	2		4					
	生物	4																				
	地学基礎	2																				
芸 術	地学	4																				
	理科課題研究	1																				
	体育保健	7～8	2	2	2	3		7	2	2	3		7	2	2	3		7				
	音楽Ⅰ	2					2	1	1			2	1	1			2					
	美術Ⅰ	2	◎2				◎2	◎2				◎2	◎2				◎2					
外 国 語	工芸Ⅰ	2	◎2				◎2	◎2				◎2	◎2				◎2					
	書道Ⅰ	2	◎2				◎2	◎2				◎2	◎2				◎2					
	コミュニケーション英語基礎	2																				
	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3	2			5	3	2			5	3	2			5					
	コミュニケーション英語Ⅱ	4																				
家 庭 情 報	コミュニケーション英語Ⅲ	4																				
	英語表現Ⅰ	2																				
	英語表現Ⅱ	4																				
	英語会話	2			2		2			▲2		▲2			▲2		▲2					
	家庭基礎	2																				
農 業	家庭総合	4	2	2			4	2	2			4	2	2			4					
	生活デザイン	4																				
	社会と情報	2																				
	情報の科学	2																				
	農業と環境	2～6	4					4	2				2	2			2					
農 業	課題研究	2～6			4			4					4				4					
	総合実習	4～12	3(1)	3(1)	3(1)		9(3)	3(1)	3(1)	3(1)		9(3)	3(1)	3(1)	3(1)		9(3)					
	農業情報処理	2～6	2				2		2			2		2			2					
	果樹	2～10			▲2		▲2			▲2		▲2			▲2		▲2					
	農業機械	2～8			△2		○2			○2		○2			○2		○2					
農 業	森林科学	2～10		1	2		3			○2		○2			○2		○2					
	造園計画	2～12		2	2		4	2	2	2		6	2	2	2		6					
	造園技術	2～8		2	2		4		2	4		6		2	4		6					
	環境緑化材料	2～8			2		2	2	1			3	2	1			3					
	測量	2～10		2			2	2	2			4	2	2			4					
家 庭 情 報	○神山創造学	3						1	2			3	1	2			3					
	○神山創造学Ⅰ	2	2				2															
	○神山創造学ⅡA	4		4			4															
	リビングデザイン	2～6								△2		△2			△2		△2					
農 業	社会と情報 (代替：農業情報処理)	2																				
	総合的な探究の時間 (代替：課題研究④)	3～6																				
	総合的な学習の時間 (代替：課題研究④)																					
農 業	単位数合計		30 (1)	30 (1)	30 (1)		90 (3)	30 (1)	30 (1)	30 (1)		90 (3)	30 (1)	30 (1)	30 (1)		90 (3)					
	ホームルーム活動(週時数)		1	1	1		3	1	1	1		3	1	1	1		3					

() は内数、週時程外に実施

平成31年度 高等学校教育課程表

					校名	徳島県立城西高等学校神山校								課程	⑤・定・通	学科	生活 地域創生	科 類			
	入 学 年		平成31年度入学			単位 数計	平成30年度入学				単位 数計	平成29年度入学				単位 数計					単位 数計
	類 型		地域創生類 食農プロデュースコース				生 活 科					生 活 科									
	学年（学級数）		1 (1)	2 (1)	3 (1)		4 ()	1 (1)	2 (1)	3 (1)		4 ()	1 (1)	2 (1)	3 (1)		4 ()	1 ()	2 ()	3 ()	
教科	科 目	標準 単位																			
国語	国語総合	4	2	3			5	2	3		5	2	3		5						
	国語表現	3			2		2			2			2		2						
	現代文A	2																			
	現代文B	4																			
	古典A	2																			
地理歴史	古典B	4																			
	世界史A	2		2			2		2		2		2		2						
	世界史B	4																			
	日本史A	2																			
	日本史B	4																			
公民	地理A	2	2				2	2			2	2			2						
	地理B	4																			
	現代社会	2			2		2			2			2		2						
数学	倫理	2																			
	政治・経済	2																			
	数学Ⅰ	3	3				3	2	2		4	2	2		4						
	数学Ⅱ	4																			
	数学Ⅲ	5																			
	数学A	2		2			2		2		2		2		2						
	数学B	2																			
理科	数学活用	2							△2		△2		△2		△2						
	○数学探究	2			2		2														
	科学と人間生活	2	2				2	2			2	2			2						
	物理基礎	2			▲2		▲2														
	物理	4																			
	化学基礎	2			△2		△2														
	化学	4																			
	生物基礎	2		2			2		2	2	4		2	2	4						
	生物	4																			
保健体育	地学基礎	2																			
	地理科課題研究	1																			
芸術	体育	7～8	2	2	3		7	2	2	3	7	2	2	3	7						
	保健	2	1	1			2	1	1		2	1	1		2						
	音楽Ⅰ	2																			
	美術Ⅰ	2	◎2				◎2	◎2			◎2	◎2			◎2						
	工芸Ⅰ	2	◎2				◎2	◎2			◎2	◎2			◎2						
外国語	書道Ⅰ	2	◎2				◎2	◎2			◎2	◎2			◎2						
	コミュニケーション英語基礎	2																			
	コミュニケーション英語Ⅰ	3	3	2			5	3	2		5	3	2		5						
	コミュニケーション英語Ⅱ	4																			
	コミュニケーション英語Ⅲ	4																			
	英語表現Ⅰ	2																			
	英語表現Ⅱ	4																			
家庭	英語会話	2			2		2		▲2		▲2		▲2		▲2						
	家庭基礎	2																			
	家庭総合	4	2	2			4	2	2		4	2	2		4						
	生活デザイン	4																			
情報	社会と情報	2																			
	情報の科学	2																			
農 業	農業と環境	2～6	4				4	2			2	2			2						
	課題研究	2～6			4		4		4		4		4		4						
	総合実習	4～12	3(1)	3(1)	3(1)		9(3)	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)	3(1)	3(1)	3(1)	9(3)						
	農業情報処理	2～6	2				2	2			2	2			2						
	野菜	2～10		2			2		▲2		▲2		▲2		▲2						
	果樹	2～10			▲2		▲2		2		2		2		2						
	草花	2～10						2	2		4	2	2		4						
	植物バイオテクノロジー	2～10		2			2	2	2		4	2	2		4						
	生物活用	2～7			2		2			3	3			3	3						
	グリーンライフ	2～8		1	2		3														
家庭	○神山創造学Ⅲ	3						1	2		3	1	2		3						
	○神山創造学Ⅰ	2	2				2														
	○神山創造学ⅡB	4		4			4														
	生活産業情報	2～4			△2		△2		△2		△2		△2		△2						
	子ども文化	2～6			2		2														
情報	リビングデザイン	2～6							3		3		3		3						
	フードデザイン	2～6		2	2		4		2	3	5		2	3	5						
	社会と情報 (代替：農業情報処理)	2																			
	総合的な探究の時間 (代替：課題研究④)	3～6																			
特別活動	総合的な学習の時間 (代替：課題研究④)																				
	単位数合計		30 (1)	30 (1)	30 (1)		90 (3)	30 (1)	30 (1)	30 (1)		90 (3)	30 (1)	30 (1)	30 (1)		90 (3)				
特別活動	ホームルーム活動(週時数)		1	1	1		3	1	1	1	3	1	1	1	3						

() は内数, 週時程外に実施

令和元年度 文部科学省指定
地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）
研究開発報告書（第1年次）

令和2年3月 発行

発 行 徳島県立城西高等学校神山校
所 在 地 〒771-3311
徳島県名西郡神山町神領字北399
印 刷 徳島県教育印刷株式会社

